

くまもとプロジェクト  
「予備調査報告書」

日本多機関連携臨床学会

## くまもとプロジェクト「予備調査報告書」の刊行にあたって

2016年4月14日に発生した熊本地震から1年9か月が過ぎました。この災害で亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被害を受けられた方々に心よりお見舞いを申し上げます。

この度日本多機関連携臨床学会は、くまもとプロジェクト「予備調査報告書」を刊行する運びとなりました。熊本地震の後、2016年9月に日本子ども子育て支援センター連絡協議会(kokonet)の川副孝夫先生から被災した保育所と子育て支援センターの保育者を中心とした状況調査の打診があり、10月に村上千幸先生から学会に正式に調査委託がなされました。それを受けて学会は、くまもとプロジェクトを設置いたしました。プロジェクトのメンバーは、代表・吉澤一弥(学会理事長)、丸谷充子(副理事長)、佐藤菜穂(専務理事)、岩治まとか(理事)、植野百々(学生理事)の5名です。地震発生から約7か月後の11月に熊本県にて「予備調査」を実施しました。2017年の2月には最初の予備調査報告(下関市・第8回真冬に保育を考える会)を速報いたしました。同じ2月にはアンケート調査を含む「本調査」を熊本県で実施いたしましたが、その後も報告会の機会を得て、最新の調査結果を時々刻々公表してきています。2月に予備調査報告(東京都文京区の日本女子大学にて・学会とkokonetのコラボ企画)、10月に本調査報告(下関市・kokonet 全国大会)を行い、2018年2月にも本調査報告(日本女子大学・学会とkokonetのコラボ企画)を計画しています。

熊本地震は過去の大震災と比較しますといくつかの点で異なった特徴があります。ここでは過去の2つの大震災の特徴を挙げてみたいと思います。被災後23年が経った阪神淡路大震災では、真冬の極寒の中での地震発生と大規模火災が多発したこと、後の区画整理による故郷喪失的な状況などが指摘されました。被災後7年になろうとする東日本大震災では、津波による被害と原発による放射能汚染に関連した深刻かつ広範な諸問題、そして風評被害などが指摘されました。熊本地震は、最大震度7の地震が立て続けに2回発生したことで震度5弱以上の余震が長い期間にわたって頻発した特徴があります。気象庁の発表や地震の命名が二転三転し最初の地震を前震、後の地震を本震と訂正したことも記憶に新しいところです。通常の地震とは発生や経過が異なり地震の専門家にとっても前代未聞の地震であったと言えます。こうした熊本地震の特徴は被災者の心理と行動に当然ながら特有の影響を与えました。

今回の「予備調査報告書」に続き、第2弾の「本調査報告書」の方も近々刊行予定ですので、合せてお読みいただき忌憚のないご意見を学会にお寄せいただければ幸いです。今後は、くまもとプロジェクトで蓄積された調査データを管理しつつ、メンバーがさらに詳細な検討を行い、いろいろな機会に公表して参る所存です。最後になりましたが、2回にわたる現地調査でご理解と多大なご協力を賜りましたことに心から感謝の意を表したいと思います。村上先生には調査のプロセスのすべてにおいて言葉にはできないくらい大変お世話になりました。熊本子育てネット加盟園の皆さま、熊本市役所、益城町役場、西原村役場そして関係者の皆さまありがとうございました。

2018年1月25日 日本多機関連携臨床学会

## 目 次

くまもとプロジェクト「予備調査報告書」の刊行にあたって

要旨	1
I. 調査の目的と概要	2
II. 調査方法	2
1. 実施体制	2
2. 調査方法	2
3. 調査項目	3
4. 分析方法	4
5. 倫理面への配慮	4
III. 調査結果	4
1. 保育所	4
(1) 保育所保育士	4
①安全	
②保育	
③保育者の心情	
④園児の様子	
⑤園児への対応	
⑥保護者の様子	
⑦保護者への対応	
⑧支援	
⑨職員自身	
⑩連携	
(2) 保育所園長	13
①安全	
②職員体制・配慮	
③保育	
④保護者への対応	
⑤支援	
⑥連携	
2. 子育て支援センター	16
(1) 子育て支援センター職員	16
①安全	
②内容の工夫	
③子どもの様子	
④保護者の様子	
⑤保護者への対応	
⑥支援	

(2) 子育て支援センター施設長	20
①安全	
②職員体制・配慮	
③事業内容の工夫	
④情報	
⑤支援	
⑥連携	
3. 保護者	24
(1) 保育所保護者	24
①保育所	
②子どもの様子	
③子どもへの対応	
④支援	
⑤保護者自身	
⑥連携	
(2) 子育て支援センター保護者	30
①利用	
②子どもの様子	
③子どもへの対応	
④事業内容	
⑤支援	
⑥保護者自身	
⑦連携	
IV. 考察	34
1. 熊本地震の特徴と被災後1週間の状況	34
2. 保育所・子育て支援センター	35
3. 保育所、子育て支援センターの職員の状況	36
4. 子どもの姿と対応	36
5. 保護者の姿	37
6. 支援	38
7. 連携	39
V. まとめと今後の課題	40
1. 緊急時の保育所・子育て支援センターの活用	40
2. 乳幼児への支援の不足	40
VI. 今後に向けて	40
参考文献	40
おわりに	40
資料	42

# 熊本地震における保育所、子育て支援センターの職員と子どもと保護者の状況調査

2016年11月予備調査

## 報告書

代表執筆 丸谷充子

佐藤菜穂・岩治まとか・植野百々・吉澤一弥

### 要旨

熊本地震により被災した保育所、子育て支援センターの職員と子どもと保護者の状況を明らかにすることを目的とした「くまもとプロジェクト」の予備調査として2016年11月に現地調査を行い、質的検討により以下の結果を得た。

1) 数日のうちに連続して2回の大きな揺れが起こり、地震発生が2回とも夜間であったこと、余震の震度とペースが過去最高であったことが熊本地震の特徴であった。

2) 保育所は在園児の家庭を中心に、子育て支援センターは在宅で子育てをする家庭と他の地域から避難してきた親子を中心に、非常時の地域支援の拠点としての機能を果たし、設備の活用、子育て家庭に必要な情報の発信、子どもに関する支援物資分配の中継地点となり、近隣への出前保育などのアウトリーチを行っていた。医療関係者、自治体職員などの保護者へは、通常保育の延長、一時保育の受け入れを行い、緊急対応の最前線にいる保護者の後方支援を担う役割を果たしていた。職員は、子どもの育ちと親支援の専門職として、細やかな配慮をもって子どもと保護者の心身のケアに努め、非常事態の細やかな配慮と同時に「普段通り」の日常を心がけていた。職員は自らも被災者である中で、頻発する余震の中で子どもの命を預かる責任の重みを背負い、職務と家庭人であることの両立に葛藤を抱えていた。

3) 子どもは余震の揺れや音に敏感に反応し、親や職員から離れられないなど情緒不安定、体調面の不調といった症状を呈し、避難訓練やテレビの地震速報を真似る、積み上げた積み木を崩すなどの地震ごっこの遊びが見られた。

4) 保護者は、被災後の対応と子どものケアで疲弊し、心身の不調を抱えていた。震災以前より家族、地域とのつながりが強くなり、保育所、子育て支援センターの支援を頼りにし、保育所の保護者は職務と子どもを預けることに葛藤を感じた。乳幼児連れで避難所を利用した家庭は周囲への遠慮があった。妊娠中の母親、消防など災害時に父親が不在になる家庭の母親、ひとり親家庭では、親の負担が大きかった。

5) 緊急時の保育所・子育て支援センターの活用に関する課題、避難所等での乳幼児への支援と配慮の不足に関する課題が明らかになった。

### 〈研究者〉

吉澤一弥 日本女子大学家政学部児童学科教授（精神科医）

丸谷充子 浦和大学こども学部こども学科准教授（臨床心理士・臨床発達心理士・社会福祉士）

佐藤菜穂 日本大学医学部付属板橋病院小児科（臨床発達心理士）

岩治まとか 東京家政大学非常勤講師  
植野百々 日本女子大学大学院生

### 〈調査協力園〉

熊本子育てネット加盟園を中心とした熊本県内の13の保育所と、10の子育て支援センターの協力を得た（資料1）。

## I. 調査の目的と概要

熊本地震は、二度の連続した震度7の非常に大きな揺れと、頻発する余震により、人的被害、建造物、ライフライン、交通網の損壊など、多方面に深刻な影響を与えた。日本多機関連携臨床学会では「日本子ども子育て支援センター連絡協議会（kokonet）」から依頼を受け、甚大な被害の中での保育所・子育て支援センターの状況調査と報告を目的として、学会内に「くまもとプロジェクト」を設置した。予備調査として2016年11月に保育所、子育て支援センターの視察、インタビュー、体験レポート、本調査として2017年2月に保育所、子育て支援センター、養護施設、病院の視察、インタビュー、体験レポート、質問紙調査を行った。本稿では、被災から7ヵ月後時点から振り返った熊本地震被災地の保育所、子育て支援センターの保育内容、職員、子ども、保護者の心身の状況に関する状況の報告と保育所・子育て支援センターが果たした役割について検討する。

## II. 調査方法

### 1. 実施体制

本調査研究は、熊本地震の支援を目的として2016年11月に日本多機関連携臨床学会内に設置された「くまもとプロジェクト」の構成員により実施された。「くまもとプロジェクト（代表：吉澤）」は、学会理事長で精神科医の吉澤一弥（日本女子大学家政学部児童学科教授）、学会副理事長、事務局局長で臨床心理士・臨床発達心理士・社会福祉士である丸谷充子（浦和大学こども学部こども学科准教授）、学会専務理事で臨床発達心理士である佐藤菜穂（日本大学医学部附属板橋病院小児科）、学会理事の岩治まとか（東京家政大学非常勤講師）、学生理事の植野百々（日本女子大学大学院生）により運営されている。調査においては、吉澤、丸谷、佐藤、岩治が熊本の被災地に赴いて現地視察とインタビューを行い、植野は東京にて後方支援を行った。結果の分析においては、吉澤、丸谷、佐藤、岩治、植野の全メンバーで内容の抽出と分類を行い、丸谷が執筆を担当した。

### 2. 調査方法

#### （1）調査日

2016年11月22日（火）から25日（金）

#### （2）調査地区

〈保育所〉熊本市北区、熊本市東区、熊本市南区、宇土市、上益城郡益城町、益城郡御船町、八代市、山鹿市

〈子育て支援センター〉熊本市北区、熊本市東区、熊本市南区、熊本市中央区、宇土市、八代市、山鹿市

#### （3）調査対象者（表1）

8地区13の保育所を対象に、園長12名、職員19名、保護者3名にインタビューを、園長1名、職員17名、保護者17名に体験レポートによる調査、計69名から協力を得た。7地区10の子育て

支援センターを対象に、施設長 2 名、職員 7 名、保護者 5 名にインタビュー、職員 9 名、保護者 11 名に体験レポートによる調査、計 34 名、保育所の協力者と計 103 名の協力を得た。

(4) 調査者

くまもとプロジェクトメンバーである吉澤、丸谷、佐藤、岩治がインタビューを行った。

表 1 「保育所・子育て支援センターの調査対象者」

保育所							
	地域(協力園数)	インタビュー(人)			体験レポート(人)		
		園長	職員	保護者	園長	職員	保護者
1	熊本市北区(3園)	3	5	1		4	3
2	熊本市東区(2園)	1	2	1			
3	熊本市南区	1	1				
4	宇土市(2園)	2	2				2
5	上益城郡益城町	1	2			3	3
6	益城郡御船町	1			1	5	4
7	八代市(2園)	2	7	1		5	5
8	山鹿市	1					
	合計	12	19	3	1	17	17
子育て支援センター							
	地域(協力園数)	インタビュー(人)			体験レポート(人)		
		管理職	職員	保護者	管理職	職員	保護者
1	熊本市北区(3園)		1	1		3	3
2	熊本市東区		1	2			
3	熊本市南区	1					
4	熊本市中央区	1	1	1			
5	宇土市		2				2
6	八代市(2園)		1			4	4
7	山鹿市		1	1		2	2
	合計	2	7	5	0	9	11

(5) 手続き

①面接調査：本調査に向けての信頼関係の構築と、調査項目に関する探索的な調査として、30分～1時間程度の半構造化面接を実施し、次の「3. 調査項目」についての回答を求めた。

②体験レポート：後述の「3. 調査項目」について、自記式の調査用紙にて回答を求めた。

③園舎等の視察：調査による訪問の際に園舎等に残る被害の状況を中心に許可を得て撮影した。

④園だより等の資料収集：被災直後から数か月間の園だよりや日誌の地震に関連する記録を中心に許可を得て複写した。

3. 調査項目

東日本大震災に関する先行研究と山東こども園園長村上千幸氏からの地震直後の保育所、子育て支援センターに関する聞き取りを基盤として、支援者である保育園、子育て支援センターの職員対象の調査票と、支援を受ける保護者を対象とする調査票を作成した<sup>1) 3) 4) 6) 8)</sup>。

保育所園長、子育て支援センターセンター長、職員へのインタビュー調査と体験レポートの調査項目は以下の通りである。(資料2)

1) 年齢、性別、職種、役職、地域、家族構成、住まいの状況、避難経験に関するフェイスシート、2) 被災直後から現在までの保育所、子育て支援センターの状況、3) 被災直後から現在まで

の子どもと保護者への関わり、4) 子どもと保護者の体調面、情緒面、行動の状況、5) 調査協力者自身の体調、情緒面、就労状況、ストレス、葛藤など、6) 被災直後から現在までの支援、情報、連携について、7) 熊本の県民性について

保育所保護者、子育て支援センター利用者への面接調査と体験レポートの調査項目は以下の通りである。(資料3)

1) 年齢、性別、地域、就労状況、住まいの状況、家族構成、避難経験に関するフェイスシート、2) 被災直後から現在までの子どもの体調面、情緒面、行動の状況、3) 保育所・子育て支援センターの利用状況と保育所・子育て支援センターから受けた支援、4) 保護者自身の体調、情緒面、就労状況、ストレス、葛藤など、5) 被災直後から現在までの支援、情報、連携について、6) 熊本の県民性について

#### 4. 分析方法

面接調査の内容は文字起こしを行ってテキストをデータ化した。保育所職員、保育所園長、子育て支援センター職員、子育て支援センター施設長、保育所保護者、子育て支援センター保護者のグループ毎に、面接調査のデータと体験レポートの文章を KJ 法に準拠した方法で分類整理した。分類整理には調査メンバーの5名が当たった。始めにテキストの内容を意味のまとまりごとに区切り、次に区切った内容にタイトルをつけ、類似した内容ごとにまとめてラベリングし、内容の似たラベルを集めて小グループ化し、サブカテゴリーを生成した。次に類似したサブカテゴリーをより大きなグループに集約してカテゴリーを生成し分析を行った。

#### 5. 倫理面への配慮

予め施設長に調査を依頼し、研究の趣旨を文書及び口頭で説明して承諾を得た。調査当日には協力者に対して、研究発表や論文等で調査対象者個人が特定されることはなく、調査対象者の個人情報やプライバシーを侵すことはないこと、得られたデータは研究以外の目的で使用しないこと、アンケートへの回答をもって研究への同意とすること、同意しない場合においても不利益を被ることはないことを口頭で説明して承諾書に署名を得た。インタビューの内容の録音に関しても承諾を得た。体験レポートについては、施設長から研究の趣旨を文書及び口頭で説明の後、承諾書に署名を得て、封筒とともに協力者に手渡しをした。記入後は厳封の上、施設ごとの回収用封筒に入れて返送することで内容が回答者以外の目に触れないよう配慮した。収集したデータは、10年間の期限で調査メンバー以外には目に触れないよう日本多機関連携臨床学会事務局内にて厳重に保管し、分析する際および結果を公開する際には、データをコード化するなど個人が特定されないように配慮した。手続き上の問題に関して日本多機関連携臨床学会の倫理規定に基づいて確認を行った。

### Ⅲ. 調査結果

#### 1. 保育所

##### (1) 保育所保育士

##### ①安全(表2)

震災後の保育再開までの対応と保育内容がどのように変化したかについての問いに対する回答のうち、36の類似した内容を抽出し「連絡・確認」「安全確認」「避難訓練」「安全対策」「家庭での保育」と命名し、5つのサブカテゴリーから「安全に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表2に示した。

震災後、在園児と保護者の安否確認、地震後の所在地、保護者の仕事についてなど状況確認を行い、確認の手段としては主に電話が使われていた。電話がつかない家庭には留守電にメッセージを残す、手紙を投函するなどの個別対応の他、施設のホームページでお知らせや開園状況を周知する方法も行われていた。地震後に一斉メールシステムを取り入れたなど連絡手段の見直しを行った園もあった。開園に際して、安全に園児を受け入れるため、飛散した物品の片づけ、破損した箇所修理、高所の物を安全な場所に移す、飲料水などの生活必需品を分散して置くなどを行った。地震直後から出勤した公務員、医療関係者の保護者のために、通常の保育の延長、一時保育としての受け入れを行い、災害時対応の後方支援の役を担っていた。

表2「安全に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	内容
安全に関する内容	連絡・確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地震後、園の一斉メールシステム取り入れ</li> <li>・保護者の方へ、お便りを出した</li> <li>・災害時の連絡手段について見直し</li> <li>・電話にて、在園児全家庭への安否確認と現状の聞き取り</li> <li>・HPで開園状況を確認するよう、保護者へ伝達</li> <li>・保護者に対して地震後の所在地、仕事状況の確認を行った</li> <li>・電話がつかない家庭への手紙投函、留守電メッセージ</li> </ul>
	安全確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>・安全に保育を再開できるよう、後片づけを行った</li> <li>・園周囲の安全点検を行った</li> <li>・避難経路の安全確認を行った</li> </ul>
	避難訓練	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地震発生を想定して避難のさせ方を確認した</li> <li>・避難訓練のあり方を見直した</li> <li>・避難経路を見直した</li> </ul>
	安全対策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちが避難することを何よりも優先させる</li> <li>・余震のときには机の下に隠れるなど子どもの安全教育を行った</li> <li>・先生の声で行動できるよう訓練した</li> <li>・危険のあるクラスを移動した</li> <li>・合同保育を行った(保育室の損壊により)</li> <li>・園外に出ているときは特に注意した</li> <li>・高いところに物を置かないなど、物の置き場所を見直した</li> <li>・緊急連絡先を毎朝確認するようにした</li> </ul>
	家庭での保育	<ul style="list-style-type: none"> <li>・祖父母に預かってもらえる人にはそのような対応してもらった</li> </ul>

## ②保育（表3）

震災後に保育内容がどのように変化したかについての問いに対する回答のうち、39の類似した内容を抽出し「保育方法の変更」「行事」「子どもに寄り添う」「心をケアする」「地震について考える」「普段通り」「連絡・確認」「安全確認」「避難訓練」「安全対策」「家庭での保育」と命名し、6つのサブカテゴリーから「保育に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表3に示した。

頻発する地震の中の保育で、大きな余震が来た時にはすぐに対処できるよう保育内容を変更し、行事を中止したり延期するなか、年長児の行事は例年通りに実施していた。園児のストレスの発散、避難所での運動不足解消などを目的として体を動かす活動を増やし、園児の不安感軽減のためにきょうだい一緒に過ごせるよう合同保育とする、午睡時に部屋を明るめにする、無理に寝かせないなどの対応を行っていた。

表3 「保育に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
保育に関する内容	保育方法の変更	<ul style="list-style-type: none"> <li>・きょうだいと一緒に安心できるように合同保育を行った</li> <li>・体を動かす保育内容にした</li> <li>・地震が来たらすぐに逃げられるような内容の保育を行った</li> <li>・午睡時の照明を普段より明るめに設定し無理に寝かせない</li> </ul>
	行事	<ul style="list-style-type: none"> <li>・行事を中止にせず時期を遅らせて行った</li> <li>・お見知り遠足を中止した</li> <li>・年長さんの行事は行った</li> <li>・全国からボランティア公演等の申し込みがあり様々な経験ができた</li> </ul>
	子どもに寄り添う	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育中に抱っこを要求する子どもは、抱いて安心できるようにした</li> <li>・余震があるとみんなをあつめ「落ち着いて」と声かけを増やした</li> <li>・傾聴を心がけた</li> <li>・子どもたちの小さな変化にも気付けるよう心がけた</li> <li>・子どもたちのペースに合わせた</li> </ul>
	心をケアする	<ul style="list-style-type: none"> <li>・被災後の心のケアについて研修を受けたり勉強した</li> <li>・東日本大震災を経験した保育士に来てもらい気を付けるべき点など助言をもらった</li> </ul>
	地震について伝える	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地震についてしっかり伝える</li> <li>・怖さを伝える</li> </ul>
	普段通り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特別な対応ではない保育</li> <li>・日々の行動の積み重ねを大切にする保育</li> </ul>

③保育者の心情（表4）

保育者自身の震災前、直後、現在までの心情の変化についての問いに対する回答のうち、震災後の保育者としての心情に関する8の類似した内容を抽出し「子どもを守る」「冷静さを保つ」「寄り添う」「最善を尽くす」と命名し、4つのサブカテゴリーから「保育者の心情に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表4に示した。

保育者は、子どもの命を守らなければならないという責任と、再び大きな地震が来た時には命を守りきれない自信がない不安との間で葛藤していた。余震が頻発する中でまず自分自身が冷静さを保つように努め、子どもと保護者に不安を与えないように笑顔で心がけて接し、保育者として最善を尽くそうとしていた。不安を共有することで震災前より子どもと保護者に寄り添う気持ちが高まっていた。

表4 「保育者の心情に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
保育者の心情に関する内容	子どもを守る	<ul style="list-style-type: none"> <li>・何があっても子どもを守ろうと必死に考えた</li> <li>・今度地震が来たら子どもを助けられない。担任として子どもを守る事が出来る自信がない</li> </ul>
	冷静さを保つ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「自分たち保育士がパニックになっている場合ではない」と自分を律した</li> <li>・自分の不安を見せないように笑顔で過ごした</li> </ul>
	寄り添う	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不安を共有し子どもや保護者に今まで以上に寄り添うよう心掛ける気持ちが高まった</li> </ul>
	最善を尽くす	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日々できることはできる限り行いたい</li> </ul>

④園児の様子（表5）

震災後の園児の体調面、情緒面、遊び方についての問いに対する回答のうち、47の類似した内容を抽出し「情緒」「行動」「生活」「母からは離れない」「身体接触」「地震について」「体調」「変化なし」と命名し、8つのサブカテゴリーから「園児の様子に関する内容」のカテゴリーを生成した。

具体例を示した結果を表5に示した。

余震の揺れや音に敏感になり怖がったり泣いたりする、少しの刺激で怒り出す、テンションが高くなる、イライラしている、攻撃的になった、甘えがひどくなった、泣き出すと落ち着くまでに時間がかかるようになった、退行が見られた、吃音が出たなど情緒が不安定になり、遊べない、遊びが攻撃的になるなどの行動が見られた。生活に関してリズムが崩れて入眠まで時間を要する、トイレを失敗するようになるなどが見られた。登園時に母から離れ難くなり、保育中も保育士から離れず身体接触を求めてきたなどの様子が見られた。体調を崩しやすくなった子どももいた。遊びの中で自衛隊の救助の様子を再現する、避難訓練の遊びをする、携帯やテレビの地震速報を真似るなど地震ごっこをする、また遊んでいても地震があると自分から机の下に隠れる子どももいた。乳児と幼児では乳児の変化の方が少なかった。保育所と自宅や避難所では、園では変わらぬ様子に見えたが家では親から離れなくないことを保護者から聞き取っていた。

表5 「園児の様子に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
園児の様子に関する内容	情緒	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大きな音、余震を怖がる、泣く</li> <li>・ちょっとしたことで怒り出す、テンションが高いなど情緒が不安定だった</li> <li>・イライラしてストレスがたまっていた</li> <li>・泣き止むまでに時間がかかるようになった</li> <li>・甘えがひどくなった</li> <li>・退行がみられた</li> <li>・吃音がみられた</li> </ul>
	行動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遊べなくなった</li> <li>・噛みつく、人形を打ったり蹴ったりするなど攻撃的になった</li> <li>・落ち着きがなく動き回る</li> </ul>
	生活	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活リズムが乱れていた</li> <li>・睡眠不足の様子がみられた</li> <li>・午睡時、入眠までに時間を要するようになった</li> <li>・トイレを失敗するようになった</li> </ul>
	体調	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全般的に体調を崩しやすくなった</li> </ul>
	母から離れない	<ul style="list-style-type: none"> <li>・登園時に母から離れられない</li> <li>・泣きながら登園してくる子がいた</li> <li>・後追いがひどくなった</li> </ul>
	身体接触	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育士にしがみつく</li> <li>・側から離れない</li> <li>・抱っこが増えた</li> </ul>
	地震について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自衛隊のヘリコプターを作る、救助の見立て遊びをする</li> <li>・遊びの中での避難訓練をする</li> <li>・携帯の緊急地震速報をまねる</li> <li>・遊びの中で「地震です」という言葉をよく用いるようになった</li> <li>・揺れを感じると机の下にもぐって安全確保しようとする子がいた</li> <li>・「地震あったね」「棚が倒れた」など地震の話題が多くなった</li> </ul>
	変化なし	<ul style="list-style-type: none"> <li>・乳児はいつも通りだった</li> <li>・家ではよく泣くとか親から離れないと聞いたが園では変わらなかった。</li> </ul>

### ⑤園児への対応（表6）

通常保育内・外での子どもへの関わりについての問いに対する回答のうち、保育の中での29の類似した内容を抽出し「安心感を与える」「一人ひとりへの対応」「普段通り」「遊び」「地震について」「避難訓練」「こころのケア」「ゆとり」と命名し、8つのサブカテゴリーから「園児への対応に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表6に示した。

職員は子どもの不安感を軽減し、園にいる間は安心してほしいという気持ちで接していた。具体

的には言葉がけを多くする、スキンシップをとる、近くにいる、大きな声を出さないなどの配慮を行い、まとまってトイレに行く、午睡の時の照明を明るめにするなど保育内容を工夫していた。また進級直後であったため、前年度の担任の元で過ごした例もあった。被災経験の違いや受け止め方、降園後の状況を考慮して個別の配慮を行い、避難所などでよく眠れない子どもには夜にぐっすり眠れるよう午睡の時間を短くしたり、ストレスの発散になるよう外遊びや体を動かす遊びを多くするなどの工夫をしていた。吃音が見られるようになった子どもには様子を見ながらいつも通りに接し、子どもが楽しかったと感じられるように、子どもの希望する遊びを多くしていた。地震について年齢に応じた説明をして、過度に怖がらないように配慮した上で、避難訓練を行った。研修を受ける、主治医のアドバイスを得るなどして、子どものこころのケアに関する対応方法を学び実施した。非常事態の細やかな配慮と同時に「普段通り」の日常を心がけていた。

表 6 「園児への対応に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
園児への対応に関する内容	安心感を与える	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「怖かったね」と寄り添い、「大丈夫だったね」と安心させる言葉をかける</li> <li>・スキンシップを多くとる</li> <li>・園にいる間は子ども達に安心してほしいという思いで接した</li> <li>・いつも側にいるようにした</li> <li>・子どもを怯えさせないよう、大きな声を出さないようにした</li> <li>・集団でトイレに行く時間を設けた</li> <li>・午睡時の照明を普段より明るめに設定した</li> </ul>
	一人ひとりへの対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・震災のトラウマ(物が倒れてくるなど)、大雨、雷、揺れなど不安を感じている子どもに個別に対応した</li> <li>・登園時、泣いて親と離れることが出来ない子どもに個別に対応した</li> <li>・抱っこを求めてくる子どもには、彼らの気持ちが落ち着くまで抱きしめた</li> <li>・トイレを怖がる子どもには、一緒についていった</li> <li>・睡眠リズムが崩れている子については午睡の時間を短くし、家でぐっすり眠れるよう個別に対応し、不安がる子を無理に寝かせることはしなかった</li> <li>・進級直後ということもあり現担任に慣れていない子は、以前の担任のもとで過ごした</li> <li>・吃音が見られるようになった子へはいつも通りに接した</li> </ul>
	遊び	<ul style="list-style-type: none"> <li>・園にいる間はたくさん遊べるよう配慮した</li> <li>・子どもたちとしっかり触れ合い、子どもたちが何をして遊びたいかを重視した</li> <li>・子どもたちが友だちと遊ぶことができるよう心掛けた</li> <li>・集団遊びや散歩など、子どもが笑顔になれること、「ああ、楽しかった。面白かった。」と思える取り組みをした</li> <li>・外遊びで体をたくさん動かし、子どもたちのストレス軽減に努めた</li> </ul>
	地震について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地震について子どもたちに説明する</li> </ul>
	避難訓練	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちが怖がらないよう、予告してから避難訓練を実施するようにした</li> <li>・過剰な訓練により子どもたちの不安を煽らないようにした</li> </ul>
	こころのケア	<ul style="list-style-type: none"> <li>・囁託医より震災に関するアンケート調査が行われ医師からのアドバイスを得て対応した。</li> <li>・地震ごっこをした方が良いと聞き、発散するために無理にやめさせなかった</li> <li>・子どもたちの地震に対する想いや言葉を受け止めるようにした</li> </ul>
	ゆとり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ゆとりある時間を大切にした</li> </ul>
	普段通り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・普段通りの接し方を心がけた</li> </ul>

#### ⑥保護者の様子（表 7）

震災後の保護者の体調面、情緒面、家庭環境についての問いに対する回答のうち、15 の類似した内容を抽出し「不安」「睡眠不足」「疲れた様子」「情緒」「子どもへの対応」「生活上の困難」と命名し、6つのサブカテゴリーから「保護者の様子に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表 7 に示した。

頻発する余震の不安、子どもを預ける不安、睡眠不足、疲労感からイライラする、子どもに当たってしまう、PTSD の症状など、日々の姿からと聞き取りから保護者の状況を把握した。再開後は、

子どもの変化に戸惑う姿と対応方法に関する相談が増え、住居、仕事などの保護者自身の生活上の困難に関しての訴えと相談もあった。

表 7 「保護者の様子に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
保護者の様子に関する内容	不安	<ul style="list-style-type: none"> <li>・余震が続いていた時期には、会話の中に不安の色が見られた</li> <li>・不安だらけだったと思う</li> <li>・子どもを預けることへの不安が見られた</li> </ul>
	睡眠不足	<ul style="list-style-type: none"> <li>・余震のせいで眠れない、揺れを感じると眠れなくなるという訴えが多かった</li> </ul>
	疲れた様子	<ul style="list-style-type: none"> <li>・疲れ切った表情だった</li> <li>・震災後は元気がなかった</li> </ul>
	情緒	<ul style="list-style-type: none"> <li>・バタバタして落ち着かない様子だった</li> <li>・この先の不安から子どもに当たってしまうと言う保護者がいた</li> <li>・イライラすることが多くなったと話す保護者がいた</li> <li>・3か月～半年でPTSDになった保護者がいた</li> </ul>
	子どもへの対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの様子にどう対応すればよいか戸惑っていた</li> <li>・子どもの相談が増えた</li> </ul>
	生活上の困難	<ul style="list-style-type: none"> <li>・修理が終わらず自宅に住めないなど、住居に困っていた</li> <li>・自営業の方のお店が倒壊し、落ち着くまで数ヶ月かかっていた</li> <li>・家がなくなった方がいた</li> <li>・仕事がなくなった人がいて大変そうだった</li> <li>・高齢者と暮らせなくなり市外に預けていた</li> <li>・未だに仮設住宅に入居している家庭もある</li> </ul>

#### ⑦保護者への対応（表 8）

保護者への通常と通常は行わない関わりについての問いに対する回答のうち、34 の類似した内容を抽出し「関わり方」「不安の受け止め」「子どもに関する情報共有」「家庭状況の理解」「相談にのる」「妊娠中の保護者への対応」「情報提供」「物資の提供」「反省」と命名し、9つのサブカテゴリーから「保護者への対応に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表 8 に示した。

しっかり話を聞く、笑顔で対応するなど関わり方に留意し、保護者の不安を個別対応で受け止める、子どもの家庭での様子と家庭状況を理解した上で保護者の相談にのり、必要な情報提供と支援物資の提供を行っていた。特に妊娠中の保護者に対して個別に配慮して対応していた。訴えの少ない保護者に対して踏み込んで関わる必要があったのではないかとの反省があった。

表 8 「保護者への対応に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
保護者への対応に関する内容	関わり方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「大丈夫ですか」「お疲れ様」と声かけを行う</li> <li>・しっかり話を聴く</li> <li>・笑顔で対応する</li> <li>・共感して寄り添う</li> <li>・保護者一人ひとりに時間をかけて対応した</li> </ul>
	不安の受け止め	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもを預けることに不安を感じている保護者に対し子どもたちの家での様子を聴く</li> <li>・休園中も保護者の不安も受け止めをした</li> <li>・情緒不安定な子どもの保護者には一日の様子など話すことにしていた</li> </ul>
	子どもに関する情報共有	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちの家での様子を聴く</li> <li>・お迎えのとき、保護者に対して子ども一人ひとりの様子をしっかりと伝える</li> <li>・親子ともに安心できるよう、子どもの変化をこまめに伝えた</li> <li>・子どもの様子のやりとりがより詳しくなった</li> </ul>
	家庭状況の理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>・被災家庭に近況を尋ねる</li> <li>・県外避難などにより長く休んでいる園児家庭には、主担任が電話連絡し、様子をうかがっていた</li> <li>・全園児の保護者に対して、安全確認と子どもの様子の共有を行った</li> <li>・住まいや子どもの様子について、聞き取りを行った</li> </ul>
	相談にのる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者との会話の中から相談にのった</li> <li>・震災後の子どもの変化、関わり方などアドバイスをした</li> </ul>
	妊娠中の保護者への対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・妊婦の母親の不安の受け止め</li> <li>・妊娠中の保護者の方へ、体調面や子どもの様子など伺った</li> </ul>
	情報提供	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者に支援物資や配給の聞き取りを行った</li> <li>・保護者からの問い合わせへの対応(宿泊保育に関すること)</li> </ul>
	物資の提供	<ul style="list-style-type: none"> <li>・困っている家庭には訪問をしてオムツなどの生活用品、ミルクやレトルト食を提供した</li> <li>・送迎の時に声をかけて話を聞いて、困っているところには物資の提供をした</li> </ul>
	反省	不安を口に出さない保護者に対して、もう一歩踏み込んで関わったらよかった

#### ⑧支援（表 9）

仕事上や被災者としてあつてよかった支援、あつたら良かった支援についての問いに対する回答のうち、45の類似した内容を抽出し「ありがたかった支援」「自衛隊の活動」「こころのケア」「マニュアル」「あつたら良かった支援」「行政への要望」「手続きの不便」と命名し、7つのサブカテゴリーから「支援に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表9に示した。

保育所、子育て支援センターへの支援として、子ども用の服やおもちゃ、紙おむつ、粉ミルク、離乳食などの提供、掃除や片づけのボランティアの支援が大変ありがたかった。くまもんや有名人、劇団の行事で気持ちが明るくなった。メンタルケアの研修やこころのケアの支援を受けて負担が軽減した。復興に向けてのマニュアルがありがたかった。職員個人としては、地震直後は水、パンやおにぎり、炊き出しなどの食料、タオル、ウェットティッシュなどの最低限の日用品、携帯電話の充電器がありがたかった。また、自衛隊の活動が心強く、ヘリコプターの音や自衛隊員を見かけると勇気づけられた。目に見える支援に加えて、励ましの言葉がありがたかった。あつたら良かった支援として、飲料水以外の生活用水、避難所に避難していない家庭への物資の配給、家族や親戚の安否確認のサービス、配給・ガソリン・食料に関する情報が欲しかった。行政への要望として、罹災証明、応急危険度判定の手続きの時間短縮が挙げられた。

表 9 「支援に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
支援に関する内容	ありがたかった支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・水が一番ありがたかった、顔を洗ったり入浴したかった</li> <li>・パン、おにぎり、レトルト食品</li> <li>・炊き出しがありがたかった</li> <li>・タオル、ウエットティッシュ、ナプキン</li> <li>・震災翌日に携帯の充電ができる大きな機械が届き助かった</li> <li>・紙オムツ、離乳食、粉ミルク、子ども服、おしりふきなどの子ども用品</li> <li>・子どもたちにトミカが届いたことがありよかった</li> <li>・掃除、片づけボランティアが助かった</li> <li>・有名人、くまモン、劇団など子どもも皆が楽しめるイベントが良かった</li> </ul>
	自衛隊の活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自衛隊の活動がありがたかった。仮設風呂がありがたかった</li> </ul>
	こころのケア	<ul style="list-style-type: none"> <li>・心の支援がありがたかった</li> <li>・震災後のメンタルケアの研修で気持ちが楽になった</li> <li>・頑張ってくださいという励ましのことは</li> </ul>
	マニュアル	<ul style="list-style-type: none"> <li>・被災に関するマニュアルを教えてください園でも実践したり避難訓練に取り入れた</li> </ul>
	あったら良かった支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・簡易のコインランドリーやシャワーがあると助かる</li> <li>・水が不足しており、トイレが困った。給水車が来てくれたらよかった</li> <li>・避難所のように物資が届かず、ガスをつけるのも家にいるのも不安で、家族みんな1日食事ができなかった。</li> <li>・家族や親戚の安否、配給やガソリンや食料を調達できる店の情報がほしかった</li> </ul>
	行政への要望	<ul style="list-style-type: none"> <li>・市として、もう少し動いてほしかった</li> <li>・各地区へ、市の職員が見回りに来てほしかった</li> <li>・国や県の機関連携がどうなっているのか気になった</li> </ul>
	手続きの不便	<ul style="list-style-type: none"> <li>・罹災証明等の手続きの仕方がわからず、手続きに時間がかかり不便だった</li> <li>・応急危険度判定の電話が繋がらず、2週間後にメールで問い合わせた。判定に来るのに4週間かかると言われ、受けるのを止めた。</li> </ul>

⑨職員自身（表 10）

職員自身について、体調、心情、生活（就労状況）、職業人としての気持ちの変化についての問いに対する回答のうち、71の類似した内容を抽出し「体調など」「心情」「家族」「ストレス」「気持ちの変化」「回復」と命名し、7つのサブカテゴリーから「職員自身に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表 10 に示した。

体調については、不眠による睡眠不足、頭痛、眩暈、持病の悪化、生理不順、食欲不振、疲労感などがあつた。心情については、警戒音、室内にいる時の不安、夜間の恐怖と不安、落ち着かなさと共に、生き残ったことに対する感謝の気持ちなどを感じていた。ストレスについて、余震が続いている状態、水が出ない、家が片付かない、風呂に入れない、探し物に時間がかかる、買い物ができないなど生活上のストレスと、避難所、車中泊など仮住まいに関するストレスがあつた。また、仕事と家庭との葛藤として、職員として園児を守らなければという気持ちと、職員自身の子どもや高齢の親から離れる不安との葛藤、職員自身も被災している中での休日出勤が厳しかった。被災後の気持ちの変化として、家族の絆が深まった、困っている人がいたら助けに行きたいと思うようになった、人とのつながりを大切に感じるようになったなど、家族や人への心情の変化があつた。地震の怖さを知り、備えをするようになった。11月の時点で元の生活に戻って落ち着いたとの回答もあつた。

表 10 「職員自身に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
職員自身に関する内容	体調など	<ul style="list-style-type: none"> <li>・夜眠れなくなった。車中泊で安眠できなかった。余震が続き睡眠不足だった</li> <li>・偏頭痛がひどくなり、稀に嘔吐を伴うようになった</li> <li>・震災前に体調不良はなかったが、震災後から眩暈やずっと揺れている感覚が続いた</li> <li>・鼻炎が悪化して蓄膿になり現在も薬を常時服用している。</li> <li>・生理が不規則になり、2、3ヵ月生理がとまり、その後1ヵ月くらい続いた。今は元に戻った</li> <li>・食欲がなかった</li> <li>・震災後は体調が優れず、疲れやすい</li> </ul>
	心情	<ul style="list-style-type: none"> <li>・夜が怖かった、警戒音が鳴ると怖くなる、思い出すと怖くなる、室内で過ごすことが怖かった</li> <li>・不安が大きかった</li> <li>・落ち着かなかった</li> <li>・生き残ったことに感謝</li> </ul>
	ストレス	<ul style="list-style-type: none"> <li>・余震があると「またあるのか」「続くのか」と考える</li> <li>・常に危機感がある</li> <li>・水が使えずストレスがたまった</li> <li>・家もぐちゃぐちゃで帰れない、風呂にも入れない状態での出勤が辛かった</li> <li>・避難所のストレスがあった、避難所の夕食の配給の時間が早く仕事が終わらなかった、プライバシーが全くといっていいほど無かった</li> <li>・車中泊が辛かった</li> <li>・入浴や食事もさっさとすます毎日にストレス</li> <li>・家の修理の悩み、家が片付いていないため探し物に時間がかかる</li> <li>・店の閉店状態が続き買い物ができなかった</li> <li>・心身共にストレスがたまった</li> </ul>
	家族	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の子どもをどのように守ろうか不安が大きかった</li> <li>・高齢の親の世話と体調の心配が大変だった</li> <li>・正直、自分の家族のことが心配</li> <li>・園の子どもを「仕事上は守らないといけない」と思うが自分の子どもも心配になる</li> <li>・日曜日のボランティア出勤が辛すぎた</li> </ul>
	気持ちの変化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家があること、家族がいることの大切さを感じるようになった。家族の絆が深まった</li> <li>・困っている人がいたら、すぐに助けに行きたいと思うようになった</li> <li>・人とのつながり、毎日過ごす場所の大切さを感じ、相手の気持ちを考えられるようになった</li> <li>・地震の怖さを知った</li> <li>・備えるようになり避難道具を用意するようになった</li> </ul>
	回復	<ul style="list-style-type: none"> <li>・震災直後は不安な時期があったが、現在は元の生活に戻り落ち着いた</li> </ul>

⑩連携（表 11）

機関内、多機関連携について、職場内での連携、多機関との連携、家庭内、近隣との連携についての問いに対する回答のうち、32の類似した内容を抽出し「職員間の連携」「保護者との連携」「近隣との連携」「他の園との連携」「家族内連携」「大学との連携」と命名し、6つのサブカテゴリーから「連携に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表 11 に示した。

職員間の連携として、子どもへの対応の共有、メールを使った連絡に変更する、心情的に支え合う、職員間の出勤の調整があった。保護者との連携は、家での子どもの様子を聞き保育の内容に活かした。近隣との連携は、地震をきっかけに連携をするようになった、震災前から連携をされていて震災後はさらに連携するようになったなどがあった。他の園との連携では、被害の少ない系列園や休園している園と連携しての職員の派遣があった。また被災地間の連携として、東北で震災した園から支援物資が届いた、復興に向けての対応マニュアルを送ってもらったなどがあった。家族内では、声を掛け合う、なるべく一緒に行動する、連絡方法や避難場所を確認した、近居の両親と連絡を取り合う、家族と協力して自主避難所の運営をしたなど地震をきっかけとする連携があった。他にも大学、学会、大学病院との連携、学生ボランティアによる清掃などの連携があった。

表 11 「連携に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
連携に関する内容	職員間の連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの変化やそれに対する保育士の対応について全クラスの担任と共有</li> <li>・職員間での「できる範囲の支援・対応」の共有</li> <li>・職員、保護者へのメール配信システムが作られた。通常時も非常時も、以前より早く連絡が取れるようになったと思う。</li> <li>・地震について「怖かったね」「保育中じゃなくてよかったね」などなど共有しあった</li> <li>・こころの面できつい時期だったため、十分に休むことができ感謝している</li> <li>・近くの職員が出勤するなど、出勤に関して事情を踏まえて判断</li> </ul>
	保護者との連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家で子どもたちの様子について保護者から教えてもらった</li> </ul>
	近隣との連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>・近隣と連携してさまざまな情報交換ができた</li> <li>・もともと近所とのつながりが密であり、震災後にも助け合いや思いやりのもと密に連絡を取っていた</li> <li>・震災直後、とても密な関係になった。現在は普通の関係に戻っている</li> <li>・地震をきっかけに話をしたり避難について話をして交流が持てた</li> </ul>
	他の園との連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>・系列園から保育士を派遣してもらった</li> <li>・休園している園から応援をもらった</li> <li>・東北の震災を経験した園から支援物資を送ってもらった</li> </ul>
	家族内連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地震が起きたときは声をかけ合うようにした</li> <li>・なるべく家族で行動し、一緒にいるよう心がけた</li> <li>・家族でしっかりと連絡を取り合えるよう確認し合った</li> <li>・避難場所を決めた</li> <li>・遠くに暮らしている両親とこまめに連絡を取り合った</li> </ul>
	大学との連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学病院の精神科医、臨床心理士等につないで診断を受けた</li> <li>・大学の教授を中心とする乳幼児精神保健学会との連携による親子ケアを行った</li> <li>・大学の学生ボランティアを受け入れた</li> </ul>

## (2) 保育所園長

### ①安全 (表 12)

震災後の保育再開までの対応と保育内容について管理職としてどのように対応したかの問いに対する回答のうち、25の類似した内容を抽出し「安否確認・連絡」「緊急対応」「安全対策」「避難訓練」と命名し、4つのサブカテゴリーから「安全に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表 12 に示した。

まず職員全員の安否確認を行い、次に在園児と保護者の安否と避難状況の確認、休園の連絡を行った。自宅の電話が繋がらない場合、保育所に出向いて連絡をとっていた。再開後は帰宅後の子どもの生活状況を聞き取って職員間で共有した。SNSの情報を過信せず直接やりとりをして情報を確認した。安全対策に関する内容では、避難に関して、職員の動きをシュミレーションする、避難訓練を実態に即した方法に変更する、子どもに不安を与えないように実施する、職員には抜き打ち訓練をするなどを行った。訓練内容に変更のない園もあった。次の災害に向けての備えを検討する、防災用具を揃える、災害マニュアルを見直す、園内外、通園経路の状況の把握と安全点検をする、園内各所に必要な物資を分散して配置する、災害に強い散歩車を購入する、メールを活用する連絡方法に変更するなど行っていた。

表 12 「安全に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
安全に関する内容	安否確認・連絡	<ul style="list-style-type: none"> <li>・職員全員の安否確認をした</li> <li>・在園児の安否確認、定期的に安否確認を行った</li> <li>・園児の避難状況の把握をした</li> <li>・保護者への休園連絡。連絡がつかない場合は園へ出向き連絡をした</li> <li>・帰宅後の子どもの生活状況を保護者から聞き取り職員間で共有</li> <li>・SNS情報にのらず、直接電話で情報収集</li> </ul>
	緊急対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指定避難場所にされていた小学校が環境的に現実的でないと考え、園内の安全な場所に避難してお迎えを待った</li> <li>・園長の責任で開園の判断をしなければならなかった</li> <li>・自主的に緊急一時預かりを行った</li> <li>・市からの受け入れ要請で、要件外の緊急一時預かりを行った</li> </ul>
	安全対策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育園で地震が起きたらどうするかシミュレーションし、いつどんな風に指示するか考える</li> <li>・次の震災へ向けて備えを話し合った</li> <li>・災害マニュアルを見直すことにした</li> <li>・ガラス飛散防止シートを張るなど安全点検、修理を行った</li> <li>・園周囲の状況把握のために見回り、通園経路の状況把握を行った</li> <li>・各クラスに防災グッズをそろえた</li> <li>・支援物資がつかぶれることを避けるため、園内各所に設置した</li> <li>・災害に強い散歩車を購入した</li> <li>・非常時連絡方法として、緊急時のみ一斉メール配信にした</li> </ul>
	避難訓練	<ul style="list-style-type: none"> <li>・避難訓練を実態に即したに避難方法、安全確保へ変えた</li> <li>・抜き打ち訓練で職員の意識確認をした</li> <li>・子どもに不安を与えないように避難訓練を実施した</li> <li>・訓練内容などに変更なし</li> </ul>

②職員体制・配慮（表 13）

震災直後の勤務体制とその理由に関する問いに対する回答のうち、9つの類似した内容を抽出し「シフト調整」「休暇」「生活保障」「役職としての責任」と命名し、4つのサブカテゴリーから「職員体制・配慮に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表 13 に示した。

私立保育所は園長の判断で開園を決めたため、安全責任に対しての重圧があった。職員配置、要件外で緊急一時預かりを行う、指定避難場所への経路に危険があったため避難せず園内でお迎えを待つ決断したなど、緊急時に決断を迫られる場面があった。職員体制への配慮では、管理職として園児の安全に配慮しながら、同時に職員の生活の保障にも気を配り、被災した職員と年少の子どもがいる職員に配慮してシフトを組み、他にも道路の分断などで通勤経路が変更になったなどはシフトを考慮した。また被災状況によって職員に特別休暇を与える、短時間でも一日勤務とするなど職員の生活保障も念頭に置いてシフトを組むなどの対応をしていた。

表 13 「職員体制・配慮に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
職員体制・配慮に関する内容	役職としての責任	・子どもや職員を守らねばと思った
	シフト調整	<ul style="list-style-type: none"> <li>・被災した者、小さな子がいる者へ優先的にシフト調整した</li> <li>・通勤時間や渋滞などを考慮し早番を見直した</li> </ul>
	休暇	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自宅の状態や避難指定地域の職員には特別休暇を与えた</li> <li>・自宅の被害があった職員へ休みを薦め、話を聞いた</li> </ul>
	生活保障	・正職には数時間でも勤務実績とし、生活の保障をした

### ③保育（表 14）

震災後に保育内容がどのように変化したかについての問いに対する回答のうち、11 の類似した内容を抽出し「園内の情報共有」「保育内容の指示」「保育再開の調整」「保護者との話し合い」

「心のケア」と命名し、5つのサブカテゴリーから「保育に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表 14 に示した。

職員間での子どもの現状把握と情報共有を行う、園本来の役割を優先する、行事を調整する、弁当と水筒持参で保育を再開する、保護者の希望も聞いて行事を調整する、子どもが不安にならないように環境を整備する、保育士は子ども達の側にいるよう指示を出すなど保育内容の大枠を整えた。職員をこころのケアの研修に出すなど、職員と子どもと保護者のこころのケアも行った。

表 14 「保育に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
保育に関する内容	園内の情報共有	・園内会議で子どもの現状把握や情報共有、反省をした
	保育内容の指示	・園本来の役割を優先させた ・時期を遅らせて通常の行事を行う、行事内容を変更するなど決めた ・園児が怖がらないように装飾の工夫など環境整備に力を入れた ・保育士へ子どもたちの近くにおいて一緒にゆっくり関わるよう伝えた
	保育再開の調整	・インフラが整わなかったが弁当と水筒持参で保育を再開した
	保護者との話し合い	・保護者会役員と話し合いをして行事についての希望を聞いた
	こころのケア	・職員を研修に出した ・園内ミーティングをした

### ④保護者への対応（表 15）

保護者への通常と通常は行わない関わりについての問いに対する回答のうち、8つの類似した内容を抽出し「話す」「子どもを守る」「普段通り」と命名し、3つのサブカテゴリーから「保護者への対応に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表 15 に示した。

送迎時にはなるべく声をかけるようにして、子どものことだけでなく生活や仕事の心配や不安など親に関する不安についても話を聞き、園ではしっかり子どもを守ることを保護者に伝えた。「普段通り」の対応を心がけた。

表 15 「保護者への対応に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
保護者への対応に関する内容	話す	・朝夕の声掛けを注意して行った ・子どものことに限らず話してもらった ・生活や仕事の心配不安を感じ始める保護者の話をきいた
	子どもを守る	・保育所にいるときはしっかり子どもを守ることを保護者へ何度も伝えた
	普段通り	・いつもと同じにしている

### ⑤支援（表 16）

仕事上や被災者としてあってよかった支援、あったら良かった支援についての問いに対する回答のうち、11 の類似した内容を抽出し「情報提供」「物資の提供」「ボランティア受け入れ」「大学と

の連携」「家族内の変化」と命名し、5つのサブカテゴリーから「支援に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表16に示した。

情報提供や各種案内、支援物資の配給、ボランティア、大学などからの援助の申し出の受け入れを調整した。自主避難所になった園では家族による支援があった。

表16 「支援に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	内容
支援に関する内容	情報提供	・園のホームページで再開などの情報提供、案内
	物資の配布	・支援物資の配給
	ボランティア受け入れ	・全国からボランティア公演等の申し込みがあり様々な経験をした ・掃除ボランティアが大きく助かった ・じゃましにきたんですか？と言われるほどひどいボランティアがいた
	大学との連携	・先生・学生の遊びや清掃ボランティア
	家族内の変化	・自主避難所の運営を長男、長女ともに自主的に手伝ってくれた。

#### ⑥連携（表17）

機関内、多機関連携について、職場内での連携、多機関との連携、家庭内、近隣との連携についての問いに対する回答のうち、9つの類似した内容を抽出し「園内連携」「保護者との連携」「系列園との連携」「関係機関との連携」「大学との連携」「学会との連携」「地域との連携」と命名し、7つのサブカテゴリーから「連携に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表17に示した。

職員と保護者と連携して余震対策や行事を行う、系列園の給食設備を借りる、小学校などの関係機関と情報共有をする、近隣の高齢者などへの訪問や声かけをする、大学や学会と連携して専門性を活かした支援を受ける、学生ボランティアの派遣を受けるなど連携を行った。

表17 「連携に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	内容
連携に関する内容	園内連携	・余震のたび対応を職員間で話し合った
	保護者との連携	・災害に対する会議を保護者と持つようになった
	系列園との連携	・系列園での給食設備を利用して給食を提供
	関係機関との連携	・被災に関する連携として、小学校と情報共有した
	地域との連携	・近隣の方へ訪問、声かけ、給食の牛乳を届けた ・出前保育を実施
	大学との連携	・大学関係の精神科医、臨床心理士等に子どもや親をつなぎ診断を受けた ・学生ボランティアによる清掃や園庭解放
	学会との連携	・乳幼児精神保健学会との連携による親子ケア

## 2. 子育て支援センター

### (1) 子育て支援センター職員

#### ①安全（表18）

震災後に事業内容がどのように変化したかについての問いに対する回答のうち、8つの類似した内容を抽出し「安否確認・連絡」「安全対策」「判断能力」と命名し、3つのサブカテゴリーから「安全に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表18に示した。

震災後、これまで利用していた親子の安否確認をしようとした。センター内の片づけと安全確認を行い、再開の準備をした。予定されていた行事を中止し、参加者に電話連絡を行った。余震の時は避難訓練の通りに行動する、避難が必要な場合は屋外へ出ると決めていたが、余震の度に避難するかどうかの判断が求められた。

表18 「安全に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
安全に関する内容	安否確認・連絡	<ul style="list-style-type: none"> <li>・利用されていた方全員の安否確認をしようとした</li> <li>・利用者に「本日は閉館につき、イベント中止します」と電話連絡を行った</li> <li>・遊具類の不安定な部分や落ちてしまった部分を戻しながらの安全確認を行った</li> </ul>
	安全対策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・センターの片付けと安全対策を行った</li> <li>・震災直後の約1週間は、保育園と共に閉鎖して再開に向けて準備をした</li> </ul>
	判断能力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・判断能力の必要性を感じた</li> </ul>

### ②内容の工夫（表19）

震災後に事業内容がどのように変化したかについての問いに対する回答のうち、10の類似した内容を抽出し「安心」「内容」「行事」「普段通り」「利用状況」と命名し、5つのサブカテゴリーから「事業内容の工夫に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表19に示した。

笑顔で関わることを心掛ける、再開後すぐに来所した親子、他の地域から来た親子の利用を受け入れて対応する、保育所や幼稚園の閉園で子どもの預け先に困った保護者のために緊急一時預かりを行う、併設の保育所の活動に参加する、癒しになるコンサートなどがあると親子に呼びかけるなどを行った。特別な行事は入れずにゆっくり過ごせるように配慮し「普段通り」を大切にした。

表19 「事業内容の工夫に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
事業内容の工夫に関する内容	安心	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地震が起こると避難訓練と同じように、皆で真ん中に集まり、揺れがおさまるまで待った</li> <li>・避難が必要な場合は屋外へ避難した</li> <li>・笑顔で保育を行うことで子どもが落ち着くと思う</li> </ul>
	内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・私立の保育園や幼稚園が閉園していたため、預けられなくて困っているお子さんの緊急一時預かりを行った</li> </ul>
	行事	<ul style="list-style-type: none"> <li>・癒されるコンサートなど保育園の活動と一緒に参加させてもらった</li> </ul>
	普段通り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リラックスして安心していただけるよう日常を大切にした</li> <li>・イベントを入れずにゆっくり過ごすように配慮した</li> </ul>
	利用状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・再開後すぐに数名の利用があった</li> <li>・直後は利用者が少なかった</li> <li>・被災した方々の利用が増えた</li> </ul>

### ③子どもの様子（表20）

開所後に来所した時の子どもの様子について、体調面、情緒面、遊び方についての問いに対する回答のうち、12の類似した内容を抽出し「室内に入らない」「母親から離れない」「母親と同じ」「地震ごっこ」「変化なし」と命名し、5つのサブカテゴリーから「子どもの様子に関する内容」のカテ

ゴリーを生成した。具体例を示した結果を表 20 に示した。

来所しても室内に入りたがらない、母親の側から離れない子どもの姿と、乳児など年齢が小さいと目立った変化のない子どももいた。遊びの内容では、積み木遊びのとき、揺れによる崩壊を再現して「崩れました」と言って遊ぶ子どもがいた。母親が地震に対して敏感になっており、子どもも同様の反応が見られる親子の姿があった。保護者から、来所している時は笑顔を見せているが家庭では怖がったり泣いたりすると聞き取っていた。

表 20 「子どもの様子に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
子どもの様子に関する内容	室内に入らない	・室内に入りたがらない子どもがいた
	母親から離れない	・お母さんの側から離れない子どもがいた ・お母さんにしがみついて離れない子どもがいた
	母親と同じ	・小さな子どもたちは、母親の状態をそのまま反映しているように思う ・心配性な母親の子どもは、地震に対して敏感な気がする
	地震ごっこ	・積み木遊びのとき、揺れると崩れる遊びをしていたのか「崩れました」などの言葉を聞いた
	変化なし	・0～2歳の子どもは変化が見られなかった ・特別な変化は感じていない ・センターでは笑顔でも家庭では怖がったり泣いたりすると聞いた

#### ④保護者の様子（表 21）

震災後の保護者の体調面、情緒面、家庭環境についての問いに対する回答のうち、11 の類似した内容を抽出し「不安」「避難・避難準備」「被災者支援」「変化なし」と命名し、4つのサブカテゴリーから「保護者の様子に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表 21 に示した。

震災後しばらくは、揺れるとドキッとしている姿が見られ不安そうだった。来所する親子は、子どもと2人で家にいるのが怖い、不安で誰か大人と話がしたいなどの理由で来所していた。他の地域の実家などに避難した利用者もいた。避難準備についての話題が増えた。被害の少ない地域では、他の地域から避難してきた親族の受け入れて疲れている保護者の姿があった。

表 21 「保護者の様子に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
保護者の様子に関する内容	不安	・不安が大きくなる母親の姿があった ・震災後しばらくは、揺れるとドキッとしている姿が見られた ・「日中子どもと2人でいると不安なので、誰かと話したくて…」という保護者の声を聞いた ・家にいるのが怖いと来所する方がいた
	避難・避難準備	・緊急時に備えて、避難準備をする方が増えた ・実家に避難される方もいた
	被災者支援	・被害のひどい地域から避難してきた親族の食事の世話で大変と話す人がいた
	変化なし	・被害が少ない地域であったためか、特別な変化は感じなかった ・特別気になることはなし

#### ⑤保護者への対応（表 22）

保護者への通常と通常は行わない関わりについての問いに対する回答のうち、20 の類似した内容を抽出し「不安の受け止め」「関わり方」「相談にのる」「場の提供」「何もできない」と命名し、5つのサブカテゴリーから「保護者への対応に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示し

た結果を表 22 に示した。

家で過ごすことが不安な親子の居場所となるよう心がけ、「大丈夫でしたか、被害はありませんでしたか」などの声かけをして、状況とともに不安な気持ちを受け止めようとして、状況によっては継続的に話を聞くなどの対応をした。子どもの変化や対応にとまどう保護者に助言を行い、緊急時の対応をしながら、「普段通り」の親子の居場所であろうと心がけた。親同士が情報交換など話をする場になるよう援助をしていた。ほとんど何もできなかったとの振り返りもあった。

表 22 「保護者への対応に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
保護者への対応に関する内容	不安の受け止め	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもについての不安を受け止める</li> <li>・生活など親の不安を受け止める</li> <li>・子どもと家にいると不安になる人を受け止めた</li> </ul>
	関わり方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「大丈夫でしたか、被害はありませんでしたか」等声かけをした</li> <li>・しっかりと話を聞き、気持ちを受け止めようと努めた</li> <li>・継続的に何度も話を伺った</li> <li>・気持ちを共有した</li> </ul>
	相談にのる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・育児相談にのった</li> <li>・夜泣きや指しゃぶり、ぐずりの相談が増えた</li> </ul>
	場の提供	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「何かあったら、ここに来れば大丈夫」という場所であろうとした</li> <li>・いつも通りに親子の居場所であろうとした</li> <li>・避難所より支援センターの方が落ち着くと来室する親がいた</li> <li>・家より支援センターの方が安心と来室する親子がいた</li> <li>・いつでも気兼ねなく足を運べる場所</li> <li>・親同士の情報交換の場となっていた</li> </ul>
	何もできない	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ほとんど何もできなかった</li> </ul>

#### ⑥支援（表 23）

仕事上や被災者としてあってよかった支援、あったら良かった支援についての問いに対する回答のうち、17 の類似した内容を抽出し「情報提供」「訪問・出前保育」「あってよかった支援」「近隣市との連携」と命名し、4つのサブカテゴリーから「支援に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表 23 に示した。

センター内での支援として、来所した保護者の目につくように物資や医療など、避難用品、こころのケアに関する情報提供を行い、県・行政からの震災に関するちらしを置くなどした。アウトリーチの支援としては、利用者の家に物資を届ける、乳児の家庭を訪問する、避難所になっている施設を訪ねて利用者の様子を確認する、出前保育などを行った。他の地域からの避難者に対して、遊び場としての利用の受け入れと情報提供を行ったセンターもあった。「あってよかった支援」として、水、紙おむつ、トイレトーパー、近隣の温泉の無料開放、子どものストレス反応と大人の関わり方についての情報は、職員とともに保護者への情報提供にも役立った。

表 23 「支援に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
支援に関する内容	情報提供	<ul style="list-style-type: none"> <li>・避難後に熊本に戻ってきた人が情報が知りたくてセンターに来た</li> <li>・月1回発行していた通信の中で、こころのケアに関する事柄を取り入れた</li> <li>・県・行政からの震災に関するちらしを配布するなど、注意を促した</li> <li>・センター利用者に避難用品を準備することの大切さを伝えた</li> </ul>
	訪問・出前保育	<ul style="list-style-type: none"> <li>・利用者の家に物資を届けた</li> <li>・被災して避難している利用者の顔を見に、各校区の中学校やコミュニティーセンターを訪ねてまわった</li> <li>・保育園の職員と共に地域の避難所への出前保育の支援活動を行った</li> <li>・乳児訪問を実施した</li> </ul>
	あってよかった支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・近くの温泉の無料開放が助かった</li> <li>・水、紙オムツ、トイレトペーパーが助かった</li> <li>・子どもに見られるストレス反応と大人の関わり方を記載してあるプリントが役にたった</li> </ul>
	近隣避難者への支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他市町からの避難者の受け入れについて、早急に対応した</li> <li>・近隣市町からの避難者に遊び場の提供をした</li> </ul>

(2) 子育て支援センター施設長

①安全 (表 24)

震災後に事業内容がどのように変化したかについての問いに対する回答のうち、13 の類似した内容を抽出し「安否確認・連絡」「安全確認」「避難訓練」「防災の意識」と命名し、4 つのサブカテゴリーから「安全に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表 24 に示した。

連絡網を活用して職員の状況を確認し、利用者の家庭の状況を確認して帰宅後の子どもの様子を聞き、方法として SNS からの情報に頼らず、直接電話などで得られた情報を信用するようにしたという回答もあった。再開に当たって、施設の状況確認と施設の周囲の状況の見回り、安全確保の方法を検討し、避難訓練を継続して行い防災の意識を強く持つようしていた。

表 24 「安全に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
安全に関する内容	安否確認・連絡	<ul style="list-style-type: none"> <li>・職員と常に連絡網で連絡をする</li> <li>・利用者にごまめに家庭の状況をたずねて帰宅後の子どもの生活を聞き取っていた</li> <li>・SNSの弊害。情報にはのらず、直接電話をかけた</li> </ul>
	安全確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>・建物の状況確認、見回りをした</li> <li>・再開後の安全確保など考えた</li> </ul>
	避難訓練	<ul style="list-style-type: none"> <li>・避難訓練を継続する</li> </ul>
	防災の意識	<ul style="list-style-type: none"> <li>・防災の意識を強く持つ</li> </ul>

②職員体制・配慮 (表 25)

震災直後の勤務体制とその理由に関する問いに対する回答のうち、11 の類似した内容を抽出し「安否確認」「勤務の配慮」「心のケア」「職員確保」「事務の多忙」「公務員の責務」と命名し、6 つのサブカテゴリーから「職員体制・配慮に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表 25 に示した。

職員の被災状況と体調や家庭状況を把握し、小さい子どもがいる職員は優先的にシフトを組む、自宅が損壊した職員、避難指定された地域に居住する職員は特別休暇を与える、パート・臨時の職員は時間を満たしていなくても出勤扱いにするなど配慮をした。緊急一時預かりを実施した施設は職員の状況に配慮しながら人員の確保を行った。職員をこころのケアに関する研修に出して施設内

でシェアするなど職員の心理面への配慮を行った。管理職は通常より作成しなければならない書類が増えて負担感があつた。公立の施設では施設長としての責務に加えて、避難所の運営の業務が加わるなど自治体職員としての役割も同時に果たしていた。

表 25 「職員体制・配慮に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
内容の工夫	安心	<ul style="list-style-type: none"> <li>・安心して過ごせるように努める</li> <li>・地震後の援助は親子一緒に行う</li> </ul>
	ゆったり過ごす	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いつもと変わらず</li> <li>・出かけた時に出かけられる</li> <li>・話しがたくさんできるようにフリーの時間を増やした</li> <li>・家庭的な雰囲気を持たせた</li> </ul>
	行事	<ul style="list-style-type: none"> <li>・親子で遊ぼう会という親子で参加する行事をピアノコンサートに変えて癒しの行事にした</li> <li>・行事を遅らせた</li> <li>・楽しい経験で地震を塗り替える</li> </ul>

### ③事業内容の工夫（表 26）

震災後に事業内容がどのように変化したかについての問いに対する回答のうち、11 の類似した内容を抽出し「安心」「ゆったり過ごす」「行事」と命名し、3つのサブカテゴリーから「事業内容の工夫に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表 26 に示した。

利用者が安心して楽しく過ごせるよう、親子一緒にできることを行う、行事を減らして通常より自由に過ごす時間を増やすなどを工夫し、親子が安心して自分のペースで話をしたり、ゆっくり過ごすことができるように配慮していた。同時にいつもと変わらない対応を心がけた。行事については時期を遅らせる、行事内容を変更して癒しになるコンサートを開催するなどしていた。

表 26 「事業内容の工夫に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
内容の工夫	安心	<ul style="list-style-type: none"> <li>・安心して過ごせるように努める</li> <li>・地震後の援助は親子一緒に行う</li> </ul>
	ゆったり過ごす	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いつもと変わらず</li> <li>・出かけた時に出かけられる</li> <li>・話しがたくさんできるようにフリーの時間を増やした</li> <li>・家庭的な雰囲気を持たせた</li> </ul>
	行事	<ul style="list-style-type: none"> <li>・親子で遊ぼう会という親子で参加する行事をピアノコンサートに変えて癒しの行事にした</li> <li>・行事を遅らせた</li> <li>・楽しい経験で地震を塗り替える</li> </ul>

### ④情報（表 27）

支援に関する内容と連携に関する内容についての問いに対する回答のうち、11 の類似した内容を抽出し「情報収集」「情報提供」「情報交換」と命名し、3つのサブカテゴリーから「情報に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表 27 に示した。

「情報収集」については、SNSに頼らず、口コミなどのアナログな活動での医療情報などの近隣情報の収集と、行政から届く支援物資、こころのケアに関してなどに関する情報収集を行っていた。「情報提供」については、施設内に掲示、パンフレット配布、ホームページによる発信などの方法で、利用者や母親グループなどに情報提供をした。相互の情報交換のツールとして LINE を活用

していた。

表 27 「情報に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
情報に関する内容	情報収集	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アナログな活動をした</li> <li>・近場で情報収集にまわった</li> <li>・行政から届いている支援物資の情報をもらった</li> </ul>
	情報提供	<ul style="list-style-type: none"> <li>・病院情報など保護者からの問い合わせに答えた</li> <li>・支援物資の場所を知らせた</li> <li>・ホームページで情報提供をした</li> <li>・センター内に支援物資の内容を張り出した</li> <li>・センター内に震災によるケアのパンフレットを置いた。</li> <li>・母親グループに情報提供した</li> </ul>
	情報交換	<ul style="list-style-type: none"> <li>・LINEのグループを作り連絡を取り合ったり情報交換をした</li> </ul>

#### ⑤支援（表 28）

仕事上や被災者としてあってよかった支援、あったら良かった支援についての問いに対する回答のうち、20の類似した内容を抽出し「出前保育」「場所の提供」「物資の提供」「被災者支援」「公務員・医療従事者への支援」「支援者支援」「ボランティア受け入れ」「あってよかった支援」「あったらよかった支援」と命名し、9つのサブカテゴリーから「支援に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表 28 に示した。

休館時には避難所への出前保育を行う、避難所に園の備品を提供する、避難所に避難していない人に替わって配給を受け取りに行くなどアウトリーチの支援を行っていた。再開後は、施設内での支援として水、紙おむつ、子ども服など収集した支援物資を利用者に提供する、乳幼児の家庭で必要な物品の譲渡会や交換会を開催する場所を提供する、他の地区から避難してきた人を受け入れて支援するなど行っていた。被害の少なかった地域では、フリーマーケットを実施して売り上げを義捐金として被害の大きい地域に送るなどの支援をしていた。子どもを預けている保育所が閉園している医療従事者・自治体職員などへの支援として緊急一時保育を行った施設もあった。ボランティアによる支援の受け入れの調整を行い、特に福島など他の被災地からの支援は積極的に受け入れた。課題として、物資を集めたが配布の方法がわからなかった。あってよかった支援として、「タッチケア」「キッズボックス」などの乳幼児の親子向けの無料の行事、おむつなど子ども用品の支援があった。「あったらよかった支援」として、高齢者も心配があり訪問や見回りが必要であるとのことだった。

表 28 「支援に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
支援に関する内容	出前保育	・休館時に避難所へ出前保育を行った
	場所の提供	・譲渡会や交換会の場所を提供した
	物資の提供	・物資(水、紙おむつ、子ども服)を支援センター利用者へも配布 ・避難所に園に備品を持って行った ・物資の配布しようとしたが、どこにもっていったらよいかわからなかった
	被災者支援	・周辺住民など避難してきた人を受け入れて支援した ・公的避難所でないため物資が届きづらかった ・配給に受け取りに行けない人の分を受け取りに行った ・フリーマーケットを実施して売り上げを義捐金として送った
	公務員・医療従事者への支援	・子どもの緊急一時保育を行った
	支援者支援	・食糧を届けたり支援に来てくれた人の支援に努めた
	ボランティア受け入れ	・ボランティア受け入れの調整をした ・福島からなどの慰問を積極的に受け入れた
	あってよかった支援	・「タッチケア」「キッズビクス」を無料で開催できた ・オムツなどの子ども用品を早急に送ってくださってありがたかった
	あったらよかった支援	・高齢者が心配だった。見回りなどがあると安心できた

⑥連携（表 29）

機関内、多機関連携について、職場内での連携、多機関との連携、家庭内、近隣との連携についての問いに対する回答のうち、11の類似した内容を抽出し「職員間の連携」「保護者との連携」「他の園との連携」「地域との連携」「他地域との連携」「関係機関との連携」「他の被災地との連携」と命名し、7つのサブカテゴリーから「連携に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表 29 に示した。

支援情報や利用者に関する情報を職員全員で共有して連携する、保護者と連携して被災後の子どもの行動理解と対応方法を共有する、他の施設と連携として閉所している施設から開所している施設に職員を派遣する、物資を他の施設と融通するなどを行った。他の地域との連携として、直接物資を受け取れなかった施設では、一旦近隣の施設に物資を送ってもらい、園バスで受け取りに行くなど複数の地域との連携を行った。関係機関との連携では同じ地区の小学校との情報交換、相談内容によって役所の母子保健担当部課につなぐ、他の地域から避難して来た親子を公的機関につなぐなどを行った。他の被災地との連携として、親子への対応や復興に関する情報をもらう、被災経験のあるボランティアを積極的に受け入れるなどを行っていた。

表 29 「連携に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
連携に関する内容	職員間の連携	・聞き取った情報は職員間で担任の垣根をこえて支援
	保護者との連携	・安定してきたときに子どもがわがままを言いたすだろうがそれはわがままでなく今まで我慢していたものが出てくることだと理解し受け止めようと保護者・職員間で共有していた
	他の園との連携	・休園中に他の園からの応援要請に応えた ・他の保育園などに連絡して物資があることを伝えてみにきてもらった
	地域との連携	・日頃地域にお世話になっているので、地域の保育園として何か貢献する
	他地域との連携	・直接物資を受け取れず、北九州に送ってもらいそこまで園バスで取りにいった
	関係機関との連携	・小学校と情報交換を行っている ・赤ちゃん連れで避難している母親の情報を聞くと保健師に連絡して行ってもらう ・避難している方が支援を受けられるように公的機関につないだ
	他の被災地との連携	・東北での結果に基づいた情報がとても役になった ・福島からなどの慰問を積極的に受け入れた

### 3. 保護者

#### (1) 保育所保護者

##### ①保育所（表 30）

保育所の利用に関して、震災後の保育内容の変化、保育所で受けた支援の内容について、職員に関すること、保育所に期待することについての問いに対する回答のうち、32 の類似した内容を抽出し「再開への感謝」「震災後の対応」「子どもへの対応」「保護者の心情」「情報提供」

「園外での支援」と命名し、6つのサブカテゴリーから「保育所に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表 30 に示した。

震災後の早い再開、再開に向けての職員の努力、安全に子どもを預かるための工夫や配慮に感謝をしていた。子どもと保護者に対して震災前と変わらない「普段通り」を心がけていることに安心感を得ていた。子どもについては、緊急時の子どもへの行動への適切な対応と子どもに寄り添って、こころのケアをしてくれていることを感じていた。保護者については、子どもの心配ごとへの相談、保護者自身の不安な気持ちの受け止めと、職員以外の園医のカウンセリングやアドバイスなどから安心感を得ていた。園から発信されるさまざまな情報が役立っていた。同じ避難所に避難していた保育士が子どもと遊んでくれたなど、保育の時間外でも支援があったことをありがたく感じていた。

表 30 「保育所に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
保育園に関して	再開への感謝	<ul style="list-style-type: none"> <li>・震災後まもなくの再開は、働く親にとって大変助かった</li> <li>・自らも被災しながら、1日も早い園再開に向けて懸命に震災後の対応してくれた</li> <li>・再開直後2日間は弁当持参だったが、週明けから給食が再開され、ありがたかった。水が止まっていた状況の中、職員には血の滲むような苦労があったと思う</li> <li>・先生方の思いは、復興に向けた足がかりであり、大きな功績だと思う</li> </ul>
	震災後の対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・登園時、出欠の○付け作業が行われるようになった</li> <li>・再開後しばらくはクラスの補修のため、年長児と同室での保育だった</li> <li>・安全面の配慮がしっかり行われていた</li> <li>・避難訓練が以前よりもしっかりと行われるようになった</li> <li>・自ら調理場に入る、朝早くから夜遅くまで働く、支援物資を集めに回るなど特に園長が懸命に対応していた。</li> </ul>
	子どもへの対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年長児の中には自分の気持ちを言葉でうまく表現できず、行動で示す子もいたと思うが、そういった子へも問題なく対応していた</li> <li>・子どもの気持ちに寄り添いこころのケアをしてくれた</li> <li>・先生方も被災者で子どもに寄り添って安心させてあげる対応をしていた</li> <li>・「子どもたちに震災前の日常を…」という園側の気持ちが伝わってきた</li> </ul>
	保護者支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもに関する相談に乗ってもらったり、話を聞いてもらったりして助かった</li> <li>・震災直後は保育園に預けることに対して心配な気持ちがあったが、家にいても子どもが落ち着かず、休園明けに初めて登園したときに子どもの笑顔に救われた。</li> <li>・園医作成のアンケートをもとに、カウンセリングやアドバイス、メッセージが受けられた</li> <li>・震災前と変わらない対応で心が軽くなった。</li> </ul>
	情報提供	<ul style="list-style-type: none"> <li>・避難所生活時、園の再開に関することなどさまざまな情報を提供してくれた</li> <li>・子どもとのかかわり方、親の気持ちのフォローに関する冊子やパンフレットをいただいた</li> </ul>
	園外での支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・避難所生活時、同じ避難所に園の保育士が避難していて子どもと遊んでくれて助かった</li> </ul>

②子どもの様子（表 31）

震災後の子どもの体調面、情緒面、遊び方の変化についての問いに対する回答のうち、54の類似した内容を抽出し「情緒」「状態」「言動」「地震ごっこ」「母から離れない」「対処しようとする」「体調不良」「避難」「変化なし」と命名し、9つのサブカテゴリーから「子どもの様子に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表 31 に示した。

揺れや物音に怯える、怖がる、不安そうな様子、甘えが多くなる、怒りっぽくなる、興奮していたなど情緒が不安定になっていて、母の側を離れなくなり、身体接触を多く求めるようになった。なかなか寝付かない、夜泣きをする、寝言を言う、「怖い夢を見た」というなど睡眠に関する問題、夜尿が増えたなどの変化があった。行動の変化としては、指しゃぶりをするようになった、1人でトイレに行けなくなった、登園できなくなった、自宅を怖がるようになったなどがあつた。言動としては、地震に関する話題が多くなり、音がすると「地震？」と聞いて来る、「お利口にしていなかったから地震きたの？」など、なぜ地震が起こったのかを問う子どももいた。遊びの中では地震ごっこが多く見られ、中には地震から期間を置いてから地震ごっこをするようになった子どももいた。子どもの地震への対処行動として、揺れが来ると自分から外に逃げる、「どこに逃げる？」と聞いてくる、非常事態であることを理解して親の言うことに従う、自ら着替え一式を枕元に準備するなどが見られた。食欲不振、発熱、風邪、胃腸炎、肺炎など体調面の不調がみられた。

表 31 「子どもの様子に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
子どもの様子	情緒	<ul style="list-style-type: none"> <li>・静かな時や落ち着いている時に地震が来るとおびえた様子が見られた</li> <li>・強い揺れがくると身体をビクッとさせて不安そうだった</li> <li>・誰かが側にいないと不安がるようになった</li> <li>・甘えが多くなった</li> <li>・怒りっぽくなった</li> <li>・暗がり、物音を怖がるようになった</li> <li>・情緒面が不安定になり、興奮しているなどがあった</li> </ul>
	状態	<ul style="list-style-type: none"> <li>・なかなか寝付けられない、夜泣き、寝言があった、夜尿をするようになった</li> <li>・指しゃぶりをするようになった</li> <li>・1人でトイレに行けなくなった</li> <li>・食欲が落ちた</li> <li>・保育園に行けなくなった</li> <li>・地震を怖がるためアパートに帰れなかった</li> </ul>
	言動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・音がすると「地震？」と聞いてくる</li> <li>・「怖い夢を見た」と言うことが多い</li> <li>・時々思い出したかのように地震直後の話をする。最近また多くなっている</li> <li>・被災直後から「お利口にしていなかったから地震きたの？」などの発言が度々あった</li> </ul>
	地震ごっこ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・普通に遊んでいたかと思うと急に「地震よー」と言っておもちゃ箱をガタガタと揺らして遊んだりした</li> <li>・遊びの中で度々地震ごっこをしていた</li> <li>・地震から少したってから友達やいとこと「地震ごっこ」をするようになり口や遊びに地震を出せるようになった</li> </ul>
	母から離れない	<ul style="list-style-type: none"> <li>・親の側を離れなくなった</li> <li>・遊んでいても姿が見えなくなると泣く</li> <li>・ベタベタとくっついてくる</li> </ul>
	対処しようとする	<ul style="list-style-type: none"> <li>・余震がくる度敏感に反応して外へと逃げていた</li> <li>・余震がくると「どこに逃げるの？」と心配する</li> <li>・小さいながらも一大事であることを理解し、親の言うことをよく聞いてくれた</li> <li>・いつでも逃げられるようにと下着を含む替え一式を自ら枕元に準備して寝る姿が見られた</li> </ul>
	体調不良	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発熱があった</li> <li>・風邪を引いた</li> <li>・胃腸炎になった</li> <li>・地震直後からお盆明けくらいまで体調を崩しやすかった</li> <li>・肺炎にかかり入院した</li> </ul>
	避難	<ul style="list-style-type: none"> <li>・余震をずっと怖がっていたので他所へ避難した</li> </ul>
	変化なし	<ul style="list-style-type: none"> <li>・震災前と変わらず元気</li> <li>・特に変化がなかった</li> </ul>

### ③子どもへの対応（表 32）

震災後に子どもに行ったこと、心がけるようになったことについての問いに対する回答のうち、31の類似した内容を抽出し「安心感を与える」「こども優先」「地震について」「遊びの確保」「伝える」「普段通り」「反省」「避難所の様子」「年長のきょうだい」と命名し、9つのサブカテゴリーから「子どもへの対応に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表 32 に示した。

言葉かけ、スキンシップ、一緒に寝る、一人にしないなどの方法で安心感を与え、早めに迎えに行くなど子ども優先の生活を心がけていた。余震対策として、危険のないところに寝かせるなどの環境の工夫、大人の指示に従うように教える、子どもだけにいる時の対処方法を具体的に教えるなどを行った。不安な生活の中でも子どもが楽しい時間を過ごせるように遊びの環境を確保しようとした。地震ごっこは地震の恐怖を遊びで表現して発散しているととらえて静観していた。子どもの前では保護者自身の不安を口にしない、地震の話題を出さないなどを心がけていた。「また地震く

る?」「お利口にしていなかったから地震きたの?」などの質問に困惑し返答に戸惑った。震災直後は親自身も日々の生活に追われて余裕がなく、子どもと向き合うことが難しかったが、少し落ち着いてきてからは「普段通り」に接しようと心がけた。避難所の生活では、子どもがよその家のスペースに入ってしまったたり、子どもを静かにさせることに気を使い、小学校の再開が遅れたため、小学生が暇を持て余していたことで親にとっても子どもにとってもストレスが大きかった。地震を経験したことで、水が出る、食事が温かい、布団で眠れるなど当たり前のことが幸せであると伝える機会となった。

表 32 「子どもへの対応に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
子どもへの対応	安心感を与える	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「地震は怖かったね、でももう大丈夫よ」等の言葉をかけたようになった</li> <li>・スキンシップを増やし、子どもの話をしっかり聞くよう心がけた</li> <li>・子どもが「お利口にしていなかったから地震きたの?」と言う度、そうではないことを伝えた</li> <li>・一緒に寝るようにしている</li> <li>・なるべく一人にしないようにしている</li> </ul>
	子ども優先	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭内では子どもを一番に考えて行動した</li> <li>・早めのお迎えを心がけ、休まずに利用している</li> </ul>
	地震について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いつ地震がくるかわからないこと、地震が来たときは机の下にもぐること、家の中に子どもだけの状態で地震がきたときは何も倒れてこない部屋に逃げ込むことを伝えた</li> <li>・地震が起きた際には大人の指示に従って行動するよう、常に伝えるようにしている</li> <li>・危険のないところに寝かせる</li> <li>・なるべく思い出さないように地震の話はしないようにした</li> <li>・「また地震くる?」と聞かれて来ないとも言えず困った。「来るかもしれないけど準備してたら大丈夫」などと言うしかなかった</li> </ul>
	遊びの確保	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外出や家での遊びなど子どもにとって楽しいことをしてあげるようにしている</li> <li>・地震に関する遊びについて否定も肯定もせず、見守った</li> </ul>
	伝える	<ul style="list-style-type: none"> <li>・蛇口をひねれば水が出る、温かいご飯を食べられる、温かい布団で眠れるなど、当たり前のことが幸せなことであると伝える機会が増えた</li> </ul>
	普段通り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・被災前と変わらずに接している</li> </ul>
	反省	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもが甘えたがっていたのにしっかりと甘えさせてあげられなかった</li> <li>・日々の生活に追われバタバタしていると子どもにゆっくりとかまう時間がとれなかった</li> <li>・直後はビリビリしていてまともに子どもの相手が出来ていなかった</li> </ul>
	避難所	<ul style="list-style-type: none"> <li>・避難所の体育館や廊下を元気に走り回り、よその家のシートにまで関係なく入り込んでしまうため、遊ばせるのに気を遣った</li> </ul>
	年長のきょうだい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・上の子は小学校の再開がどんどん延期され、暇を持て余していた。同じく避難してきている友だちとトランプなどで遊ぶか、DVDを見るか、DSゲームをするかといった生活だった。</li> </ul>

#### ④支援（表 33）

被災後の支援について、子ども、生活上のことで受けた支援、あってよかった支援、あつたら良かった支援についての問いに対する回答のうち、58の類似した内容を抽出し「避難所」「保育所の支援」「公的支援」「人的支援ボランティア」「あってよかった支援」「あつたらよかった支援」「情報」「人とのつながり」と命名し、8つのサブカテゴリーから「支援に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表 33 に示した。

表 33 「支援に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
支援に関する内容	避難所	<ul style="list-style-type: none"> <li>・住む場所や食事が保障されありがたかった。支えられた</li> <li>・NPO法人の避難所はペット可だった。ペットを飼っている人にとってはありがたいと思う</li> </ul>
	保育園の支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育所から支援物資をもらった</li> <li>・自分の職場に届いた支援物資を園におすそ分けするために持って行ったとき、快く受け入れてくれ、必要な方が自由に持って帰れるようスペースを作ってくれた</li> </ul>
	公的支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・救助隊員の車を見るだけで安心感があった</li> <li>・忙しい中役場の方が親身になって話を聞いてくれた。仮設住宅について、全国や町からの経済的・人的支援、土木業者に関する情報、就労に関する補助金等の支援について、子どもや家族の健康に関するアドバイスなど、さまざまな情報をもらった。</li> <li>・役場の方が食料品を届けてくれた</li> <li>・スクールカウンセラーや校長先生、PTAの方々、保育士、町の子ども課の方々からの励ましが大変熱意のあるものだった</li> <li>・かかりつけ医が気にかけて、相談にのってくれたのが有難かった</li> </ul>
	ボランティア	<ul style="list-style-type: none"> <li>・避難所にボランティアの方が来て体育館の掃除や汚物まみれのトイレ掃除に来てくれた</li> <li>・ボランティアが食料品を届けてくれたり、汁物を作ってくれた。</li> <li>・ボランティア学生が子ども達と遊んでくれた</li> <li>・中学生のボランティアが掃除に来てくれた</li> </ul>
	あってよかった支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・飲料水が助かった。</li> <li>・地震直後にはお茶や乾パンの配給本当にありがたかった。命を繋ぐことができた</li> <li>・パンやおにぎり等すぐに口にできるものは、子どもたちへ手軽に早く食事させることができ助かった</li> <li>・ラジオがありがたかった</li> <li>・トイレトイレットペーパーやおむつなど多くの物資を受け取ることができた</li> <li>・赤ちゃん用のミルク、離乳食。避難所でミルクのお湯を用意してくれた。レトルトや瓶詰のものではなく紙コップに入れられていたため、どこかで手作りされたのだと思う。家庭にて自炊できない状況で、手作りのものを食べさせられるのは、ありがたい。</li> <li>・オムツ、おしりふきなど子ども用品が助かった</li> <li>・自宅が半壊認定を受け、保険料、保育料の減額がありがたかった</li> <li>・支援金、特別補助金が商売をしているので助かった</li> <li>・夫の会社からミルクやお菓子の支給があつてありがたかった</li> </ul>
	あったらよかった支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・簡易トイレ、水が欲しかった</li> <li>・避難所の1教室を開放し小さな子どもが気兼ねなく遊べるプレイルームを設けてほしかった</li> <li>・おもちゃや絵本、シャボン玉など子どもが遊べるもの、移動動物園があったら子どもが楽しめる</li> <li>・学校に避難している子どもたちだけでも教室に集め、学習やボランティア活動、震災についての話し合いなど行うとよかったのではないかな。大変なときだからこそ学べることがあったと思う</li> <li>・日中、子どもだけを避難所に残して仕事に行かなければならない親は、出勤しながらも心配だったと思う。安心して出勤できるよう子どもたちの預かりシステムがあればよかった</li> <li>・乳児や障害のある子どものために、避難所内に別室を設けてあげるとよいと思う</li> <li>・震災後はなかなか美容室に行けず、カットボランティアなどを増やしてもらえると助かる</li> <li>・ブルーシートを避難所に集めて販売する</li> <li>・応急修理制度があるとよい</li> </ul>
	情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>・震災直後、医療機関の利用ができるかわからず心配だった</li> <li>・どこの小児科が開いているか避難所に張り紙してあったのが助かった</li> <li>・今後の復興に向けた取り組みが明示されておらず今も不安を感じる</li> </ul>
	人とのつながり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・こういう支援があるからいつでも言っねと声をかけていただきとても嬉しく思った</li> <li>・感謝の気持ちをどう表現すればよいか見直す機会となった</li> <li>・県内の方よりも、県外の方の温かさを実感した</li> </ul>

避難所が設置されていることが支援であった。保育所の支援として、園に届く支援物資をもらった、支援物資の収集、分配のスペースを作り窓口になってくれた。公的支援として、救助隊員の姿に安心感があった。自治体職員が物資の配給、励まし、相談に対する助言に親身になってくれた。心理の相談員、医師などの専門職の相談が心強くありがたかった。ボランティアによる支援について、避難所の体育館の掃除や汚物まみれのトイレ掃除、食料品の配給や調理、子ども達の遊び相手になるなどで助けられた。あってよかった支援として、飲料水、地震直後におにぎりなどすぐに食べられるものが助かった。情報を得るためのラジオ、粉ミルク、離乳食、紙おむつ、おしりふきな

子ども用品の配給に助けられた。時間が経過すると調理した温かい汁物など、手作りのものを子どもに食べさせられるのがありがたかった。保険料や保育料の減額や補助金の措置に助けられた。勤務先から子どもの粉ミルクやお菓子の支給があった。あったらよかった支援として、避難所に簡易トイレの設置、乳幼児の子どもが遊べるプレイルームの設置、子どもが遊べるおもちゃ、乳児や障がい児のいる世帯は避難所内に専用のスペースを設けてはどうかなどの意見があった。また学齢期の子どもの支援として空き教室に集めて勉強する、保護者が仕事に出た小学生のための預かり、大変なときだからこそ学べるがあったと思うのでボランティア活動に参加させる、他もカットボランティア、ブルーシートの販売、応急修理制度があったら、情報を集める支援も必要であった。公私にわたる支援、県外からも支援をうけて感謝と人とのつながりを実感していた。

#### ⑤保護者自身（表 34）

保護者自身について体調、心情、生活の変化、就労状況についての問いに対する回答のうち、82の類似した内容を抽出し「地震直後の状態」「不安」「体調面の変化」「子どもを守る」「回復困難」「葛藤」「感謝」「仕事について」「周囲の扱い」「気持ちの変化」と命名し、10のサブカテゴリーから「保護者自身に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表 34 に示した。

地震直後は揺れへの恐怖で心理的に追い詰められ、少しの余震でも動悸がしたり足が震え、気分の落ち込みがあり、非常にイライラして子ども達を強く叱りつけたりと余裕がなかった。再び大きな地震があるのではないかと不安が大きかった。今でも余震が起こると子どもに駆け寄り、子どもの命を守る責任の重さを改めて感じた。特に父親が消防など災害時に不在になる家庭やひとり親家庭の母親は「自分が頑張らなければと思いつめた」と不安が大きかった。体調面の変化としては頭痛、イライラ、睡眠不足、不安定な体調、地震後の食欲不振による体重減少、過食による体重増量などがあった。体調面の変化はない保護者もあった。被害の大きな地区では、倒壊した状態のままの家屋もあり、現状を目にすると涙が溢れる、「頑張って前を向いていくしかない」の一言が苦しくてこれ以上頑張れない、やっと新生活を始めたが、また地震がくるのではと不安があるなど、地震から7ヵ月経過しているが心理面での負担の高い状態が継続していた。仕事については、被災直後から震災の現実から逃げるように通常出勤をしたが、出勤しても子どものことが気にかかって不安を感じていた。消防、福祉、教育など職種によっては「仕事を優先するのが当然」といった雰囲気があり、職務と家族の役割との間で葛藤を感じていた。状況が落ち着くまで休暇を与えられて子どもと過ごせた保護者と、強い出勤要請に退職を考えた保護者がいるなど職場による配慮の違いがあった。避難所として親戚などを受け入れた家庭では、大人数の調理など慣れない生活に負担を感じていた。自営業を営む保護者は、仕事場の修繕に多額の出費がかかったなど金銭面での負担があった。被害の大きい地域では「(家の倒壊は) 保障されるんでしょう？」と言われて傷つき、2次被害を経験していた。震災を振り返ると、命が助かったことへの感謝、周囲の人への感謝、日々の幸福感が増した、今を一生懸命生きようと思った、被災したからこそ、人の痛みや苦しみ、つらさをより強く実感した、復旧・復興に時間がかかるが子どものために大人ができることをするなどの心境を経験していた保護者もあった。6ヶ月を過ぎてから落ち着いてきたとの回答もあった。

表 34 「保護者自身に関する内容」

カテゴリ	サブカテゴリ	具体例
保護者自身に関する内容	地震直後の状態	<ul style="list-style-type: none"> <li>地震後は少しの余震でもドキドキしたり足がガクガクしたり気分が落ち込んだが、6ヶ月を過ぎて落ち着いてきた</li> <li>地震直後に非常にイライラした、震災前よりイライラすることが増えた</li> <li>地震から1週間は子ども達を強く叱りつけたり余裕を持って接することができなかった</li> <li>揺れへの恐怖によって、心理的に追い詰められていた。今振り返ると笑い話だが、一時期「阿蘇山が噴火するかも…」と本気で考えていた</li> <li>2度目の地震の時に緊迫感が増して余震の度にハラハラして気持ちが落ちていた</li> <li>4月18日から休みや早退なく通常出勤をした。今思えば、震災の現実から逃げるように仕事をしていたのかもしれない</li> <li>震災後初めて出社したとき、「仕事に地震や津波があったら…」と子どものことが気にかかり、不安でいっぱいだった</li> </ul>
	不安	<ul style="list-style-type: none"> <li>2度の大きな地震があったので今でもまた来るんじゃないかという不安がある</li> <li>教員なので地震が起きてもすぐに迎えに行けないことが不安</li> <li>裏が山なので土砂崩れがおこらないか不安</li> <li>先のことを考えると、不安や恐れにとらわれる</li> <li>9月から新生活を始めたが「また大きな地震がきて、新調した物や大切な物がダメになったらどうしよう」と不安が大きくなっている</li> </ul>
	体調面の変化	<ul style="list-style-type: none"> <li>直後は頭痛がしたり、体調が不安定になった</li> <li>震災直後は緊張状態が続いていたためか、食欲が湧かなかった。</li> <li>地震後は体重減少し現在は過食になり、体重増量</li> <li>しっかりしなければと思うが体調不良でイライラしていた</li> <li>生活状況や就労状況が大きく変化し、睡眠時間がなかなか取れない</li> <li>体調面の変化は特になし</li> </ul>
	子どもを守る	<ul style="list-style-type: none"> <li>余震が起こると今も子どもに駆け寄ってしまう</li> <li>地震直後に主人が消防に行き、子ども達を守るのは私しかないという気持ちをしっかり持たなければと思った</li> <li>震災後しばらくは、子どもから離れることが全くできなかった。現在は子どもから離れても大丈夫になった</li> <li>母子家庭であるため、自分ががんばらなければと思いつめた。祖父母に手伝ってもらい、助かった</li> </ul>
	回復困難	<ul style="list-style-type: none"> <li>無残な姿となった自宅を見たとき、得も言われぬ虚しさや悲しみに襲われ、すべてを失った気持ちになった</li> <li>多くの宝物を失い、埋まらないこころの隙間をどのようにして埋めてどのようにして消化していけばよいかかわからない</li> <li>現在も、震災直後からのことを振り返ると涙が溢れてきて、こころの傷が癒えていないことを実感する</li> <li>「頑張って前を向いていくしかない」の一言がどんなに苦しいか。必死に頑張っているのに、これ以上どうすればよいか</li> </ul>
	葛藤	<ul style="list-style-type: none"> <li>消防団に属しているため地震直後に家族と一緒にいられた</li> <li>職業人と家庭人の葛藤がかなりあった。家族と一緒にいたかったが、自分たちより困っている人のため、動ける状況にある自分が動くべきと思い、消防やボランティアに力を入れた</li> <li>福祉の仕事柄「自分の家庭よりも仕事を優先するのが当然」といった雰囲気があり、仕事復帰を悩んだ</li> <li>休園中も仕事に行かねばならなかったのだが、祖父母に預けた子どものことが気になり、仕事が手につかなかった。一緒にいてあげられなくて申し訳ないという思いになった</li> <li>親戚の避難所となったので大勢の人のまかないが大変だった</li> </ul>
	感謝	<ul style="list-style-type: none"> <li>地震の経験により人の優しさに触れる機会が多くなった</li> <li>家族全員が無事だったこと、命が助かったことに感謝した</li> <li>何気ない日常が幸せであることに改めて気付いた</li> <li>震災を通して、周囲の人々の温かさや思いやりを改めて感じ、小さなことにも幸せを感じられるようになった。日々の生活における幸福感が増した</li> <li>こういう支援があるからいつでも言っておねと声をかけていただきとても嬉しく思った</li> <li>感謝の気持ちをどう表現すればよいか見直す機会となった</li> <li>知人からの多くのLINEや電話に感謝した</li> </ul>
	仕事について	<ul style="list-style-type: none"> <li>震災後は仕事が忙しくなり大変だった</li> <li>保育園と学校が休みで仕事に行けなかった</li> <li>生活が落ち着くまで仕事の休みがもらえ、子どもと一緒にいられた</li> <li>被災の程度が激しいことや避難している現状を伝えたにもかかわらず、出勤を強要するLINEあり。人間不信になり、退職することも考えた</li> <li>震災直後にも直ちに出勤し尽力している職員が美化され、1週間お休みした自分是非難されていたらしい</li> <li>仕事場の修繕に多くの費用を使ったので「これから頑張らない」という気持ち</li> <li>仮設住宅に入り、職場が遠くなった</li> </ul>
	周囲の扱い	<ul style="list-style-type: none"> <li>震源地である益城町に住んでいたため、職場で腫れ物に触るよう扱われ心苦しかった</li> <li>自分から震災の話をするとう情を買っているかのような扱いをされ、いまだに震災を引きずっているかと思われる</li> <li>県内でも、震災に対する温度差を感じる</li> <li>「保障されるんでしょう？」と直接言われた</li> </ul>
気持ちの変化	<ul style="list-style-type: none"> <li>今後大地震が発生したときに生き抜いていけるよう、備えておくことが大事だと思う。</li> <li>天災は誰が悪いといったものではなく、とらわれても仕方ない。今を一生懸命生きようと思っている</li> <li>被災したからこそ、人の痛みや苦しみ、つらさをより強く実感している</li> <li>復興には時間と費用がかかると思うが子どもが大人になるまでに大人ができることをしていきたい</li> <li>まだ復旧・復興には時間がかかるが、多くの方の支えを原動力にこれからもがんばっていききたい</li> </ul>	

## ⑥連携（表 35）

家庭内や近隣との連携についての問いに対する回答のうち、41の類似した内容を抽出し「家族内の連携」「実家との連携」「親戚との連携」「近隣との連携」「通常に戻る」「課題」と命名し、6つのサブカテゴリから「連携に関する内容」のカテゴリを生成した。具体例を示した結果を表 35

に示した。

家族内の連携、実家との連携、親戚との連携などの親族間で連携していた。近隣の人との連携としては、給水所、支援物資の配給情報をこまめに共有した、車を乗り合わせて避難所に行った、風呂を貸してもらった、消防団などに属していたので団員同士のつながりが頼りになったなど、これまでのつき合いがより密になり、知らなかった人とも協力してつながりが深まったとの回答があった。また、直後は連携が密だったが時間の経過と共に通常のつき合いに戻った、それぞれ自分のことに追われて連携はなかったとの回答もあった。連携の課題として高齢者との連携があがった。

表 35 「連携に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
連携に関する内容	家族内の連携	・家族で協力し、子どもたちの外出を増やすようにしている
	実家との連携	・震災後は、実家からの助けが無ければ考えられないというほどに助けてもらった ・被害がひどかったのである程度の修繕が終わるまで実家に住まわせてもらった
	親戚との連携	・親戚同士で連絡して避難を促した ・隣家の親戚とは常に声を掛け合って一緒に行動した
	近隣との連携	・水の出る家に風呂を貸してもらった ・震災後に近所の1人暮らしの人と車を乗り合わせて避難所に行った ・地震で近所の人や見知らぬ人とも協力が出来た ・給水所、支援物資の配給情報をこまめに共有した ・被災前より在籍していた消防団の方々がとても頼りになった。必要な情報をすぐに教えていただけ ・近隣の方々からさまざまなアドバイスや情報、心配してくれる思いを受けて復興に向けた準備を進めてこられた。感謝してもきれない。 ・もともと助け合いのある地域だったので近隣の人と一緒に乗り越えていくことができた
	通常に戻る	・直後は連携が密だったが今は通常の生活に戻っている
	課題	・年寄が多いのでまた地震が起こったら心配 ・皆自分の家の被害の補修や片づけにいっぱいいっぱい助け合ったかどうか

## (2) 子育て支援センター保護者

### ①利用 (表 36)

震災後の利用についての問いに対する回答のうち、9つの類似した内容を抽出し「利用再開について」「他所の利用」と命名し、2つのサブカテゴリーから「連携に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表 36 に示した。

再開してしばらくは利用を控えていた保護者が多かった。余震の様子をみていた、夫が自宅待機で家にいたため家族で過ごしていた、子どもが「行きたくない」と言ったなどの理由と、県外に避難したため利用できなかったなど物理的な距離による理由があった。災直後は子育て支援センターが閉館していて利用できなかったため、早く再開した市の児童センターを利用したなどの理由で利用施設の変更があった。

表 36 「利用に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
利用に関する内容	利用再開について	<ul style="list-style-type: none"> <li>被災後数日間は県外の実家へ避難していたので利用できなかった</li> <li>震災直後はセンターがお休みだったので利用できなかった</li> <li>様子を見てすぐには利用しなかった</li> <li>必要以外の外出は控えていたため、余震の様子を見ながら約1カ月後から利用した</li> <li>震災後1カ月は夫が自宅待機で常に家族そろって行動していたので利用しなかった</li> <li>震災直後子どもが「行きたくない」と言ったためセンターの利用回数が減った</li> <li>再開後しばらくして、子どもの気分転換になると思って利用した</li> </ul>
	他所の利用	<ul style="list-style-type: none"> <li>自宅から近く、早く再開した市の児童センターを利用することが多くなった</li> </ul>

②子どもの様子 (表 37)

再開後に来館した子どもの様子について、体調面、情緒面、遊び方についての問いに対する回答のうち、37の類似した内容を抽出し「怖がる」「言動」「母から離れない」「体調」「楽しみを見つける」「変化なし」と命名し、6つのサブカテゴリーから「子どもの様子に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表 37 に示した。

暗闇や揺れを怖がり、揺れに敏感に反応して、余震があると親の側に近寄ってきたり屋外に逃げようとする、風呂やトイレに入りたがらない、エリアメールを真似する、本震直後とその後も母親から離れなくなったなどがあがった。体調面では食欲の低下、食べられない食品に下痢気味となったなどの不調がみられた。子どもなりに楽しみにつけて避難所で他の子どもと遊んだり、車中泊を「キャンプ」に見立てたりしていた。乳幼児では地震について理解できない、熟睡していて地震に気付かなかった子どももいた。

表 37 「子どもの様子に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
子どもの様子に関する内容	怖がる	<ul style="list-style-type: none"> <li>前震時、リビングにいた。初めての経験でとても怖かった</li> <li>夜に電気を消すと、怖がるようになった</li> <li>頻繁に揺れるためだんだん恐怖心を感じるようになったようだった</li> </ul>
	言動	<ul style="list-style-type: none"> <li>「また揺れたねー」など揺れに対して敏感になった</li> <li>余震があると自分から「逃げよう!」と言う</li> <li>揺れるたびに近寄ってきていた</li> <li>震災後数日間はお風呂に入りたがらなかった。</li> <li>震災後から現在まで家のトイレに行きたがらない</li> <li>何でもない時にエリアメールの音を真似する</li> </ul>
	母から離れない	<ul style="list-style-type: none"> <li>本震の翌朝、母親から離れなかった</li> <li>揺れの怖さを感じていたのか、母親から離れなくなった</li> </ul>
	体調	<ul style="list-style-type: none"> <li>断水や閉店により食事が作れず、配給のパンなど食べ慣れない既製品を与えていたため水 下痢気味になった</li> <li>震災直後に食欲が低下した</li> <li>体調面の変化は特になし</li> </ul>
	楽しみを見つける	<ul style="list-style-type: none"> <li>避難所(小学校)生活では遊具で遊んだり他の子どもと一緒に遊んだり、車中泊では「キャン プみたい」と言い、子どもなりに楽しみを見つけていた</li> </ul>
	変化なし	<ul style="list-style-type: none"> <li>前震時・本震時ともに熟睡していて気がつかなかったため変化なし</li> <li>余震についても理解していない様子</li> </ul>

③子どもへの対応 (表 38)

震災後に子どもに行ったこと、心がけるようになったことについての問いに対する回答のうち、13の類似した内容を抽出し「安心感を与える」「地震への対処」「遊びの確保」「通常通り」「反省」と命名し、5つのサブカテゴリーから「子どもへの対応に関する内容」のカテゴリーを生成した。

具体例を示した結果を表 38 に示した。

安心感を与える対応として、余震が起きると「大丈夫よ」と声をかける、抱く、背中をさする、一緒にいるようにした。気を紛れるよう日中にたくさん遊べるようにした。地震直後は災害に関する新聞記事やテレビなどをできる限りみせないようにしていた。2,3ヶ月たってから写真やテレビを一緒にみて怖かった経験に向き合った。保護者自身も震災直後は怖がってしまったという反省があり、落ち着いてからは子どもの前では不安な顔をしないように笑顔で接し、できる限り「普段通り」に接することを心がけた。

表 38 「子どもへの対応に関する内容」

カテゴリ	サブカテゴリ	具体例
子どもへの対応に関する内容	安心感を与える	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不安にならないよう、一緒にいて抱っこしたり声をかけたりした</li> <li>・余震発生時「大丈夫よ」と声をかけ、笑顔で背中をさする</li> <li>・地震がきたら子どもを抱きしめる</li> <li>・自分自身も不安を感じていたが、子どもの前では不安な顔をしないようにした</li> </ul>
	地震への対処	<ul style="list-style-type: none"> <li>・直後は災害に関する新聞(写真)やテレビをできる限り見せないようにした</li> <li>・2-3か月後は新聞(写真)やテレビを見て、「怖かったね」と一緒に向き合った</li> </ul>
	遊びの確保	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日中は、広くてたくさん遊べる実家へ行き、気を紛らわせた</li> </ul>
	通常通り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・震災前と変わらぬ接し方をした</li> </ul>
	反省	<ul style="list-style-type: none"> <li>・被災直後は子どもの前で自分も怖がってしまったが、その後はできるだけ冷静さを装うように心がけた</li> </ul>

#### ④事業内容 (表 39)

震災後の事業内容についての問いに対する回答のうち、17の類似した内容を抽出し「安心」「相談」「話を聞く」「子どもへの関わり」「行事」「通常通り」と命名し、7つのサブカテゴリから「事業内容に関する内容」のカテゴリを生成した。具体例を示した結果を表 39 に示した。

子育て支援センターに来ることで、子どもとだけで過ごすより職員や他の親子と話すことができ、職員が余震の恐怖や家族の話を聴いて共感してくれたこと、「普段通り」に接してもらったことで安心できた。職員が子どもとたくさん触れ合ってくれて、子どもの不安を軽減するよう努めてくれたことで子どもも楽しそうで気分転換になっていた。職員の子どもへの対応が参考になった。食育講座や絵画教室などの通常行っている事業が中止や延期になったことが残念だった。

表 39 「事業内容に関する内容」

カテゴリ	サブカテゴリ	具体例
事業内容に関する内容	安心	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「困ったことはないですか」と声をかけていただき安心した</li> <li>・職員と話すことで安心する</li> <li>・昼間子どもとだけで過ごすより安心して過ごせた</li> <li>・センターにて職員や母親たちと地震や余震について一緒に話すだけで、ひとりで不安を抱えるよりもずっと心強かった</li> </ul>
	話を聴く	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話をしっかり聞いてくださり気持ちに寄り添ってもらえる</li> <li>・被災後に初めて利用した時に、話を親身になってきいていただき、子どもの情緒のことなど心配していただいた</li> <li>・震災後に初めてセンターを利用した時に職員と家や家族のことを話した</li> <li>・余震に対する恐怖心などについて共感してもらい、精神的に支えられた</li> </ul>
	相談	<ul style="list-style-type: none"> <li>・震災前と変わらず、子育てに関する質問や相談に親身に且つ丁寧に応えてくれる</li> <li>・なんでも相談できる</li> </ul>
	子どもへの関わり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちとたくさん触れ合ってくれて、子どもたちが不安にならないよう心がけてくれた</li> <li>・職員の子どもへの対応は、見ていて勉強になる</li> <li>・子どもも職員を信頼していて、センターで遊んでいると楽しそう</li> </ul>
	行事	<ul style="list-style-type: none"> <li>・食育講座や絵画教室などの講座が実施できなくなり残念だった</li> </ul>
	通常通り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・通常通りに接してもらい、とても安心できた</li> </ul>

### ⑤支援（表 40）

被災後の支援について、子ども、生活上のことで受けた支援、あってよかった支援、あったら良かった支援についての問いに対する回答のうち、24 の類似した内容を抽出し「避難所」「センターの支援」「ボランティア」「あってよかった支援」「あったらよかった支援」「情報」と命名し、6つのサブカテゴリーから「支援に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表 40 に示した。

避難所に避難したが子どもが騒ぐので居づらくなり出た。炊き出しなどボランティアに助けられた。子育て支援センターの支援として、必要な物品の情報、紙おむつなどの支援物資を得た。あってよかった支援として、新聞、スマホ、テレビなど複数のツールで入浴施設や避難所、給水場所に関する情報が多く流れていてよかった。紙おむつの配給がありがたかった。ブルーシートの配給が助かった。あったらよかった支援として、子どもの食事に関する支援、避難所で子どもが遊べるスペース、避難所に避難していない人への支援物資の配布。子どものカウンセリング、幼児の言葉での表現に代わる対応が知りたい。紙おむつや粉ミルクに関する物資の情報があるとよかった。

表 40 「支援に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
支援に関する内容	避難所	・避難先で子どもが騒ぐので居づらくなり出ていくことにした
	センターの支援	・センター長から水の情報をもたらえた ・おむつもらった ・物資の声をかけをしていただきすごいと思った
	ボランティア	・断水したり閉店したりしている中、炊き出しのボランティアに助けられた
	あってよかった支援	・新聞、スマホ、テレビなどで、入浴施設や避難所、給水場所に関する情報が多く流れていてよかった ・震災時おむつの買い置きがなかったため、おむつの配給がありがたかった ・社協からブルーシートをいただけ助かった
	あったらよかった支援	・子どもの食事に関する支援があったらよかった ・避難所で子どもが騒いでも大丈夫なスペースを作っていたとありがたい ・避難所にはベビー用品もパンも十分にあったと聞いたが避難所に行くほど家が壊れていなかったのでも買い物に苦労した。困っている人には均等に配布してほしい
	情報	・子どもの心理面でのカウンセリングについて知りたい ・幼児は言葉での表現が難しいため、それに代わる対応の仕方が知りたい ・店頭でおむつが売り切れていた。次回入荷日の情報や、おむつやミルクに関する物資の情報があるとよい。

### ⑥保護者自身（表 41）

保護者自身について体調、心情、生活の変化、就労状況についての問いに対する回答のうち、15 の類似した内容を抽出し「不安」「心身の状況」「子どもを守る」「仕事について」「回復」と命名し、5 のサブカテゴリーから「保護者自身に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表 41 に示した。

再び大きな地震が来るのではないかと毎日不安だった。子どもを守る方法を必死で考えた。心身の状況としては、心身の疲労感、イライラ、小さな余震でも緊張し、妊娠中の保護者は特に不安が強く車中泊などは体調面でも厳しかった。避難してきた親族を受け入れたことで過労になり体調を崩した。育児休業中の保護者は子どもの側にいてあげたいという気持ちと、大変な時に仕事から離れていて申し訳ないという気持ちで葛藤を感じた。現在は落ち着いてきてもとに戻ったという回答もあった。

表 41 「保護者自身に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
保護者自身に関する内容	不安	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「また地震がきたら…」と不安になることがよくある</li> <li>・いつ終わりがくるかわからない毎日に不安で仕方がなかった</li> <li>・震災後1か月ほどは不安が強かった</li> </ul>
	心身の状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>・心身共に疲労していた</li> <li>・イライラしていた</li> <li>・今でも小さな余震であっても緊張する</li> <li>・地震直後に妊婦だったこともあり、車中泊などともきつかった</li> <li>・震災後に親族が避難してきて食事の世話に追われて心身ともに疲れていた。それが一段落した6月中旬に体調を崩した</li> </ul>
	子どもを守る	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分から離れないなどの子どもの変化を受け、子どものことが心配になった</li> <li>・子どもを守るにはどうしたらよいか考えた</li> </ul>
	仕事について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・会社が全壊し、勤務地が変わってしまった。育休中で何も手伝えず、申し訳ない気持ちでいっぱいだった</li> </ul>
	回復	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現在は落ち着いている</li> </ul>

⑦連携（表 42）

家庭内や近隣との連携についての問いに対する回答のうち、19 の類似した内容を抽出し「家族内の連携」「実家との連携」「近隣との連携」「親戚との連携」と命名し、4 つのサブカテゴリーから「連携に関する内容」のカテゴリーを生成した。具体例を示した結果を表 42 に示した。

日中も連絡を取り合い、精神面で支えあったなど家族内の連携、実家に避難した、実家の両親を泊らせた、実家の両親から支えられたなど実家との連携、親戚との連携、近所の人々と声をかけ合い心強く感じた、アパート内で給水や炊き出しや配給に関する情報交換、声のかけ合いなど行ったなど近隣との連携があった。

表 42 「連携に関する内容」

カテゴリー	サブカテゴリー	具体例
連携に関する内容	家族内の連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日中も夫と電話がつながるため、電話で連絡を取り合った</li> <li>・家族内でお互いに助け合うようにした</li> <li>・精神面で家族に支えられた</li> </ul>
	実家との連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>・近くに住む両親を頼りにしている</li> <li>・余震が続いた時期には両親を自宅に泊まらせた</li> <li>・夫、実家の両親が精神的な支えになってくれた</li> <li>・実家に避難させてもらった</li> </ul>
	親戚との連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いとこの家に泊まった</li> </ul>
	近隣との連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>・震災直後は近隣の人々と声をかけ合い、心強く感じた</li> <li>・震災直後はアパート内で、給水や炊き出し、配給に関する情報交換、声のかけ合いなどあった</li> <li>・震災前から近隣との付き合いがあったため、スムーズに助け合いができた</li> <li>・震災前よりも近隣の方々と話をするようになった</li> <li>・自宅で井戸水が使えるため、近所の人に利用してもらった</li> </ul>

IV. 考察

1. 熊本地震の特徴と被災後 1 週間の状況

(1) 熊本地震の特徴

2016 年 4 月 14 日（金）21 時 26 分にマグニチュード 6.5 の前震、4 月 16 日（日）1 時 25 分にマグニチュード 7 の本震、数日のうちに連続して震度 7.1 という大きな揺れが起こり、地震発生が 2

回とも夜間であり、余震の震度とペースが過去最高であったことが熊本地震の特徴であった<sup>9)</sup>。また地震発生が4月の年度当初であったことで、新年度の体制が始まったばかりであり、新入園、クラス替えをしたばかりであったことによる影響も大きかった。1回目の地震で収束に向かうと考えて気持ちを振り立たせた直後に再び大きい地震が起きたことによる心理的ダメージが大きかった。その後も大きな余震が続いたことで、再び同じ規模の地震に襲われるのではないかと不安と緊張状態が長く続き、終わりの見えないと感じる状況であった。2回とも夜間に地震が発生したため、停電した地区では暗闇の恐怖があり、行政・教育などの公的機関が開いていないことによる不安があった。一方で、夜間であったため家族が一緒にいた家庭も多く安心感があった。

## (2) 被災後1週間の状況

14日(木)21時26分の地震後の夜間に施設の様子を確認しにいった管理職、職員もいたが、本格的な状況確認と安否確認は15日(金)午前に行われていた。15日(金)の日中は比較的余震が少なかったため<sup>9)</sup>、ある程度の片づけを行うことができた。翌日から通常の生活に戻っていくだろうとの予想のもと、安否確認と現状復帰の疲労を抱えて就寝した夜間、16日(土)1時25分に再び大きな揺れに襲われた。前震で持ちこたえた建物が崩れたり、一度片づけた箇所も再び器物が散乱した状態になった。地震の恐怖の追体験と前震後の働きが徒労に終わったことから、本震後の方が心理的なダメージが大きかった。被害の大きかった地域では、余震の揺れが続く中で、自身と家族の安全を確保し、暗がりの中で夜が明けるのを待った。保育所、子育て支援センターでは、当日の夜間、翌日17日(日)に管理職と出勤できた職員が建物の状態の確認と職員と園児と家庭の安否確認を行った。震度5規模の大きな余震、過去に例のない頻度の余震が続く中で、被災者でもある職員の出勤への配慮と必要人数の確保を行い、保護者・利用者への休園連絡、散乱した遊具や事務機器、厨房機器などの現状復帰と修理、被災状況の情報収集などの緊急対応に追われた。また、私立保育所では開園の判断を園毎に委ねられたため、園長には開園判断の決断と安全責任に対しての重圧がかかった。休園した保育所・子育て支援センターでは、施設を避難所として解放する、避難所で出前保育を行う、近隣に声をかけて物品を届けたり励ますなどの支援を行っていた。被害少なかった地域では、被害の大きかった地域に職員を派遣する、物資を届けるなどの支援を行った。保護者は余震の続く中でなるべく子どもの側にいて不安を鎮めるようとした。医療関係者・自治体職員、仕事の再開が早かった保護者は、職業人であること、親として子どもを守ることに葛藤を抱えながら保育所に子どもを託して職務を果たした。

## 2. 保育所・子育て支援センター

保育所、子育て支援センターは前震と本震ともに閉所時間であったため施設内で人的被害がなく、管理職、職員にとっては大きな救いであった。新年度の体制が落ち着かない中での地震発生であったため、多くの園で新年度の行事である「おみしり遠足」を中止または延期した。地震発生から1週間程度、地域住民の臨時の避難所となり炊き出しなどを行った園もあった。太田ら(2013)の東日本大震災に関する調査においても同様に保育所や幼稚園が臨時の避難所となっていた。園児の生活の場である保育所は、給食室、シャワー室、午睡のスペースなどが整っているため、緊急時に避難所として指定することが考えられる。施設を活用することを前提に平時から食糧の備蓄を行い、特に乳幼児に必要な物品に特化して備蓄をしておくことで、市民にとっても利用しやすいのではないかと考えられる。震災後に余震が続く中で行ったことは、職員、子どもと保護者全員の安否確認と避難の状況、園を再開してからは、心身の状態の把握が加わり、職員同士で情報を共有して連携して支援を行った。保育の時間を安心、安全に楽しく過ごせるよう安全確認と環境設定を行い、き

ようだいは一緒に過ごせるよう合同保育にしたり、活動に子どもの希望を取り入れる、体を動かす活動を増やす、ボランティアによる行事を計画するなどして保育内容を工夫した。子ども達が安心して過ごせるよう、言葉かけを増やすなどの接し方にも配慮を行った。保護者に対しては送迎時の言葉かけを増やす、気持ちを丁寧に受け止める、状況によって個別に面接を行うなどの配慮を行った。再開後も頻発する余震の音と揺れ、警戒アラームが続き、非日常の中での保育であったが、最大限の配慮と共に、震災前の日常と同じ「普段通り」を心掛けた。また保育所は、医療関係者、自治体職員の保護者に対して、通常の保育を延長する、一時保育として受け入れも行うなどの対応をしており、緊急対応の最前線にいる保護者の後方支援を担う役割を果たしていた。復興に向けて目立たないが大きな功績であると言えるだろう。

子育て支援センターは、親子が好きな時に自由に来所する利用形式であるため、全ての利用者の安否確認は困難であったが、職員は震災前からの頻回の利用者の安否を気かけ、電話による安否確認や家庭訪問を実施するなど、日頃からの利用者との強い結びつきが推察された。地震後再開した当初は利用者が少なく徐々に平常時の利用数に戻っていった。再開後は行事を少なめにして、来所した親子には、子どもは自由に遊び、保護者は職員や保護者同士で話をし、親子が自由にゆったりと過ごせるように配慮した。自由に来所できる形式のため、震災後に他の地域から避難してきた親子が利用できる場所として、他の地域の在宅の親子にとっても「居場所」となるよう迎え入れ、必要な情報を提供し、適切な支援につなげる役割を果たした。また保育所の閉園で子どもの預け先に困った保護者のための緊急一時預かりを実施した施設もあり、子どもの預け先として保育所を補完する役割を担っていた。職員は緊急時の対応とともに、保育所の職員と同様に「普段通り」の対応を心がけ、子育て支援センターの「居場所」としての機能を維持しようと努めていた。

### 3. 保育所、子育て支援センターの職員の状況

保育所、子育て支援センターの職員は、不安やストレスを抱えながらも、子どもを守り、親を支援する職務を果たそうと努めていた。一方で再び大きな地震に襲われた時には子どもを守りきれないのではないかと不安を抱えていた。大宮ら（2011）の調査においては、幼稚園・保育園の保育者が最も不安に感じるのは「保育中に地震が来た時の対応」であり<sup>3)</sup>、本調査においても同様の結果となった。太田ら（2013）の調査においても「保育所・幼稚園等の基準に定められている保育者定数では子どもたちを安全に避難させることが難しい」ことが明らかになっており<sup>2)</sup>、災害時に乳幼児の安全を保障する支援体制については早急に検討すべき課題だと言える。また、職員自身も被災者としての厳しい生活と仕事の責務からの疲労とストレスが重なり、体調を崩しやすくなったなど心身の不調を抱えていた。職員自身の子どもや高齢の親など家族の役割と親子を守るという職務の両立に葛藤を感じ、休日出勤などが過重勤務になり心身両面において負担を感じていた。自治体職員は保育以外の緊急時の役割も担っており、太田ら（2013）の調査においても、同様に状況が報告されていた。震災後から休日もほとんど休んでいないという管理職の声もあり、職員には疲労が蓄積されていることが予想された。心身の健康状態のチェックとケアの体制作りが必要であると思われる。

### 4. 子どもの姿と対応

#### (1) 子どもの姿

余震の揺れや音に敏感になりなると怖がる、不安そうな様子がある、情緒が不安定になり興奮しやすくなった、イライラして少しの刺激で怒り出す、甘えがひどくなった、親や保育士などの職員

から離れない、入眠まで時間を要するようになった、怖い夢を見るようになった、風呂やトイレを怖がるようになった、トイレを失敗するようになったなどが多くの子どもに見られた。本郷ら(2013)の東日本大震災後の調査において〈不安・怯え〉と〈音への過敏性〉が多く挙げられていたが、本調査でも揺れと音への不安や怯えが多く挙げられた<sup>6)</sup>。積み木を積み上げて崩す、テレビのテロップを真似る、自衛隊の救助を真似るなど地震に関する遊びや地震に関する話題が多く見られていた。余震がくると大人の側によってくる、自ら外に逃げだす、机の下に隠れるなどの対処行動をとる子どももいた。太田ら(2013)の東日本大震災震災後の調査でも子どもたちの顕著な状態として体調を崩しやすい、少しのことでケンカになる、落ち着きがない、甘えて保育者の側を離れない、地震・津波ごっこが目立つ、おもしろい、泣きやすい子どもが多いなどが挙げられ、本調査でも同様の状態が見られた<sup>2)</sup>。乳児と幼児では、乳児は地震について理解していない様子、目立った変化は見られなかったなど、地震の影響の少ない子どももいた。幼児は地震ごっこの遊びで発散、大人に従って対処行動をとる、子どもなりに現状を理解しようとして、地震が起きた原因について、「お利口にしていなかったから地震きたの？」などの発言も聞かれた。また、避難所で他の子どもと遊んだり、車中泊を「キャンプ」に見立てて遊ぶなど、非常時であっても子どもなりに楽しみをみつけようとする姿があった。

## (2) 子どもへの対応

保育所では、言葉かけやスキンシップを多くし、子どもが楽しめる遊びを行い、体を動かす活動を行い発散や運動不足の解消をした。子どもに地震の説明をして、過度に怖がらないように配慮した上で避難訓練を行った。地震が起こった理由について、良い子にしていなかったからではないことをきちんと伝える必要がある。子育て支援センターでは、親子が一緒に行う活動をする、保護者の不安が子どもに反映することから、保護者の不安を軽減することにより子どもの不安も軽減することを心がけていた。保護者は余震のたびに子どもに「大丈夫よ」などと声をかけ、スキンシップをとる、子どもを1人にしないなどの方法で安心感を与えようとして、子どもの前では笑顔でいるように心がけていた。子どもの年齢や時間の経過を考慮しながら、怖かった経験に向き合う機会を作っていた。園ではいつも通りだが家に帰ると親から離れないことがあった。非日常の細やかな配慮と共に多くの保育士、保護者は「普段通り」の生活を心がけていた。

## (3) こころのケア

子どものこころのケアに関して、研修を受けたり主治医のアドバイスを得るなどして対応方法を学んで実施したという回答が多く見られた。太田ら(2013)の調査では、阪神・淡路大震災ではこころのケアの必要性が叫ばれたがデータの蓄積もなく、震災以降にマニュアルや手引きが作成された。東日本大震災では医学、心理学などの専門職が被災地に向いて支援に当たり、子どもに現れる症状、支援方法などが蓄積されていった。一方で現場の職員の認識では、こころのケアに関する援助が足りなかったという結果もあった。本調査においては、多くの園・子育て支援センターで職員内の数名が研修を受けてノウハウを職場に持ち帰り、職場全体で共有して子どもに接することが行われていた。持ち帰った情報を、口頭で伝える、掲示する、配布物として渡すなどの方法によって保護者に情報提供をした。より具体的な学びの機会として、東日本大震災の被災地から保育士を招いて支援方法を学んだという例もあった。被災後の子どものこころのケアに関する知見が蓄積されてきたことが活かされたと言える。

## 5. 保護者の姿

地震直後は揺れへの恐怖で心理的に追い詰められていた、少しの余震でもドキドキしたり足がガ

クガクしたり気分が落ち込んだ、余震と避難所生活での睡眠不足、疲労感、不安、頭痛、イライラ、体調の不安定、食欲不振、過食の不安から子どもに当たってしまったなど余裕を持って接することができなかった。PTSDを発症した保護者もいた。妊娠中の保護者は不安が大きく体調面でも厳しい生活を強いられた。父親が消防など災害時に不在になる家庭の母親や、ひとり親家庭の親は一人で子どもを守らなければとの心理的な負担が大きかった。保育所の保護者は、仕事でも子どものことが気にかかり、地震が起きてもすぐに子どもを迎えに行けない行政、医療、福祉、教育などの職種の保護者の不安は大きく、子どもに対して一緒にいられなくて申し訳ない気持ちを抱き、仕事や地域での役割と家庭との両立に葛藤を感じた保護者もいた。子どもが気になりながら出勤せざるを得なかった保護者の中には、地震の被害に加えて出勤を強要されたと感じて二次被害といえる心理状態にある保護者もあり、乳幼児の子どもを持つ親へは出勤の配慮が必要である。子育て支援センターの利用者は、在宅で子育てをしている保護者が多く、震災後しばらく他の地域に避難しているために、利用が遠く場合があった。利用を再開した保護者は子どもと家にいるのが怖い、不安で誰か大人と話がしたいなどが利用の理由であった。

子ども連れでの避難所生活を行った保護者は、子どもの動きや声などで周囲への遠慮と気疲れがあり、居づらくなって避難所を出ることになった家族もあった。心の回復としては、被害の大きな地区では、7ヶ月経った11月の調査時でも倒壊した自宅を見ると虚しさや悲しみに襲われて涙が出ると語るなど心の傷が癒えていない状態があった。命が助かったことへの感謝、周囲の人への感謝、日々の幸福感が増した。今を一生懸命生きようと思った、被災したからこそ、人の痛みや苦しみ、つらさをより強く実感したなどの心情の変化を経験した保護者もいた。

## 6. 支援

〈物的支援〉食糧、飲料水に関して、地震直後はパンやおにぎりなど軽食、少し時間がたつと調理した食事、温かい汁物、炊き出し、子どものお菓子、その他食料品の支援を受けた。物資では、水、トイレットペーパー、情報を得るためのラジオ、ブルーシートがありがたかった。子ども用品では、粉ミルク、離乳食、紙おむつ、おしりふき、子ども服がありがたかった。

〈施設〉避難所が設置されたこと、中でもペットを連れていける避難所の設置がありがたかった。保育所が支援物資の収集と配給の場所となった。温泉の無料開放があれば良かった。

〈ボランティア〉避難所の体育館の掃除、汚物まみれのトイレ掃除、食料品の配給や調理、子ども達の遊び相手、保育士の出前保育がありがたかった。ボランティアが清掃や片づけを担うことによって保育士が保育に集中できてありがたかった。

〈情報提供の内容〉医療、震災支援物資の配給場所、開いている店、入浴施設、給水場所、こころのケア、子どものストレス反応と大人の関わり方に関する情報がありがたかった。

〈情報提供の方法〉新聞、スマホ、テレビ、ホームページ、おたより、掲示、家庭訪問から情報を得ていた。

〈公的支援〉救助隊員がいるだけで安心感があった、自治体職員が親身になって相談にのってくれた、スクールカウンセラー、校長先生、かかりつけ医などの専門職の支援が心強かった。

〈減免措置など〉保険料や保育料の減額や補助金の措置がありがたかった。

〈あったら良かった支援〉学齢期の子どもへの支援として、空き教室に集めて勉強する、ボランティア活動に参加させる、仕事にでる保護者のための小学生の預かりがあったらよかった。避難所に避難していない人への支援物資の配布。カットボランティア、ブルーシートの販売、応急修理制度があったらよかった。

### 〈避難所の課題〉

太田ら(2013)の東日本大震災震災後の調査において、幼児の居場所として安全と子どもらしい生活の確保が必要であることが述べられており、子どもの行動への保護者の気遣いの問題が上がっていた。本調査においても、子どもが遊べるようなおもちゃの配布や行事の開催、子どもの食事や遊び、相手プレイルームの設置の希望、障がい児がいると利用しにくいという意見があり、子どもの動きや声などで避難所を出ることになった家族があった。今後に向けて、乳幼児や障がい児の家族の生活が保障される避難所の環境設定、利用の方法、避難所の支援物資の内容を検討する必要があると思われる。また避難所に簡易トイレの設置があったらどうかとの意見があった。

## 7. 連携

保育所は地域の拠点として、地震や地域情報、こころのケアなどの情報収集と情報発信、支援物資を集めて配布するなどした。アウトリーチの支援として、近隣の住宅を訪問、避難所などへの出前保育を行い保育のスキルを提供した。被災当初には複数の園が避難所の機能を果たして近隣住民を受け入れて食材を持ち寄って炊き出しを行うなどの地域連携が行われた。背景として親子3代で同じ保育所通う家庭があるなど、地域住民との結びつきが強い地域性であることが、非常時に力を発揮していた。太田ら(2013)の東日本大震災震災後の調査においても、幼稚園、保育園は近隣の住民を受け入れて臨時の避難所になるなど同様の地域連携が行われていた。

保育所、子育て支援センターの機関内連携については、余震対策、子どもと保護者の心のケアに関する情報共有、行事の予定についての話し合い、合同保育の実施など、通常時以上に施設全体での連携が行われた。他機関との連携としては、系列園と連携して給食設備を借りる、震災前から関係のある他の地域の園と連携して物資を調達するなど行っていた。役所、学校、母子保健などの関係機関との多機関連携により、支援に関する情報、地域の情報を集め、子どもや家庭の様子についての情報共有を行い、他所から避難してきた親子に必要な機関を紹介していた。

近隣住民の連携については、風呂を貸してもらった、近所の人と車を乗り合わせて避難所にいった、給水所、支援物資の配給情報をこまめに共有したなど、これまで以上につながりが深まった、これまで知らなかった人とも協力したなど自然な助け合いが生まれていた。それぞれ自分の家の被害の補修や片づけに追われて助け合う余裕がなかった、地震の直後は連携が密だったが、時間の経過とともに落ち着いてきて通常の連携に戻ったなどの地域もあった。非常時に必要な連携が迅速に行われるために、平時に連携体制を整備しておくことの重要性が示唆された。課題として高齢者への支援の不足もあげられた。

大学や学会との連携として、精神保健、医学、保育などの専門性に特化した支援と、大学生による清掃などマンパワーのボランティアがあった。清掃などを依頼することにより保育士が子どもと関わる時間を持てたことがありがたかったとの感想とともに、「実習にきたのかボランティアに来たのかわからなかった。はっきり言って迷惑だった」との声もあった。ボランティアの役割として、興味本位や善意の押し付けではなく、被災者の心情に沿う、真に役立つ支援を提供することが必要である。

## V. まとめと今後の課題

### 1. 緊急時の保育所・子育て支援センターの活用

阪神・淡路大震災、東日本大震災でも、本調査においても保育所は指定避難所になっていなくても臨時の避難所の役割を果たしていた。震災の度に避難所としての役割を果たしていることを考え

ると、日頃から非常事態に対応できる備蓄体制などを整えておく必要があると思われる。また非常事態になった場合には、保育所が避難所になっていることを想定して、配給や情報を提供すること、応援の職員の派遣などが必要である。

## 2. 乳幼児への支援の不足

太田ら(2013)の調査では、「東日本大震災の後、保育所や幼稚園、乳幼児期の子どもへの対応は小学校などに比べて非常に遅く、弱かったことは大きな問題である」と述べられている。熊本地震においても、2016年5月に熊本県内の小中学生を対象とした教育委員会の調査と臨床心理士の派遣、6月に1歳半健診、3歳健診の幼児を対象とした調査を行っているが、全ての乳幼児の心身の状況を把握はできていない状況であり、すべての乳幼児の状況把握を行うことが必要であると思われる。またこころのケアに関して、保育士、保護者などに情報提供され、身近な大人によるケアが中心となったが、乳幼児と保護者、職員の支援として臨床心理士などの専門家の派遣なども必要であると思われる。避難所での生活においても、乳幼児が泣く、遊ぶなどの子どもらしい生活が保障され、保護者が周囲への気遣いで疲弊することのない施設の活用、配慮が必要である。

## VI. 今後に向けて

今回の調査は、熊本地震における保育所と子育て支援センターの状況を探るという目的の元、聞き取りと体験レポートの内容から探索的な調査を行った。今後、今回の調査で得られた結果を基に、本調査として、職員と保護者のこころの健康状態とストレスの状況の把握と地域や属性などとの関連を検討する量的検討を行い、本調査の質的検討と量的検討を合わせて総合的な考察を行う予定である。

### 【参考文献】

- 1) 遠藤芳子. (2015)「東日本大震災の子どもと保護者・保育者の心身の健康状況と課題」看護展望, 40, No.4, 34-38.
- 2) 太田光洋・島田ミチコ・関口はつ江・磯部裕子・金珉呈・関章信・野呂アイ. (2013)「震災を生きる子どもと保育」日本保育学会 災害時における保育問題検討委員会報告書, 1-258.
- 3) 大宮勇雄 (研究代表者). (2012)「震災後の保育現場が直面する課題とその対応事例に関する調査研究」福島大学研究年報別冊, 1-11.
- 4) 辻一郎 (研究代表者). (2015)厚生労働科学研究費補助金 (健康安全・危機管理対策総合研究事業) 宮城県における東日本大震災被災者の健康状態等に関する調査 (H25 - 健危 - 指定 - 002 (復興)) 総括研究報告書, 3-12.
- 5) 後藤健介・磯望・黒木貴一. (2017)「平成 28 年熊本地震の特徴と被災状況から考える減災への課題」学校危機とメンタルケア, 9, 55-62.
- 6) 本郷一夫・加藤道代・神谷哲司・平川久美子・進藤将敏・飯島典子. (2013)「東日本大震災後の保育所における対応」東北大学大学院教育学研究科研究年報, 61, No.2, 145-154.
- 7) 森晴美. (2017)「災害時に必要とされる教員や保育士の資質能力とは 一熊本地震被災地での教員・保育士の取り組みを見つめて一」神戸海星女子学院大学研究紀要, 55, 69 - 78.
- 8) 八重樫伸生 (研究分担者). (2015)厚生労働科学研究費補助金 (健康安全・危機管理対策総合研究事業) 宮城県における東日本大震災被災者の健康状態等に関する調査 (H25 - 健危 - 指定 - 002 (復興)) 分担研究報告書「母子保健の影響に関する検討」, 35-46.

おわりに

大変にお忙しい中、甚大な被害からの復興の道半ばの時に、被災時の状況やお気持ちをお聞かせいただいた保育所、子育て支援センターの職員、保護者の皆様に感謝の言葉を申し上げます。

調査を通して、保育所、子育て支援センターともに震災前からの地域との深い結びつきがあり、地域の拠点としての役割を果たしていること、職員、保護者と地域が助け合い連携して非常時を乗り越えようとしたことを知った。地震以前とは変わってしまった環境と頻発する余震という非日常の中での献身的な努力と、可能な限りの「普段通り」の積み重ねにより日常を取り戻そうとしていることを改めて感じた。「熊本城」の損壊がどれほど熊本の方々の心を打ち砕いたか、子ども達に「くまもん」がどれほど愛されているかを知り、熊本の方々の新しいことへの受け入れの良さ、温かさ感謝し、「肥後もっこす」（一度決めたら突き進む気性）「むしゃ（武者）んよか」（かっこいい）「どぎゃんかなる」（どうにかなる）といった県民性も復興の原動力になっていることを感じた。

## 資料1 協力園一覧（五十音順、( )内は所在地）

### 〈保育所〉

熊本市立京塚保育園（熊本市東区）  
社会福祉法人小木会 小木保育園（熊本市南区）  
社会福祉法人喜育園 山東こども園（熊本市北区）  
社会福祉法人南苑会 御船昭和保育園（上益城郡御船町）  
社会福祉法人沼山津福祉会 光輪保育園（熊本市東区）  
社会福祉法人ひかり保育園（宇土市）  
社会福祉法人ひろやす会 ひろやす保育園（上益城郡益城町）  
社会福祉法人文政福祉会 文政保育園（八代市）  
社会福祉法人歩真会 あゆみ保育園（熊本市北区）  
社会福祉法人山清福祉会 認定こども園やまなみ（熊本市北区）  
社会福祉法人八代市高田東部福祉会 高田東部保育園（八代市）  
社会福祉法人緑翠会 緑川保育園（宇土市）  
山鹿市立山鹿保育園（山鹿市）

### 〈子育て支援センター〉

植木山東子育て支援センター（山東こども園）（熊本市北区）  
宇土市地域子育て支援センターひまわり（ひかり保育園内）（宇土市）  
京塚子育て支援センター（熊本市立京塚保育園併設）（熊本市東区）  
熊本市総合子育て支援センター（熊本市中央区）  
子育てホットステーションあゆみ子どもセンター（あゆみ保育園内）（熊本市北区）  
城南子育て支援センター（小木保育園内）（熊本市南区）  
八代市鏡子育て支援センター（文政保育園内）（八代市）  
八代市子育て支援センター（高田東部保育園内）（八代市）  
山鹿子育て支援センター（山鹿市）  
やまなみ子育て支援センター（幼保連携型認定こども園やまなみ内）（熊本市北区）

保育所名：	地域：	調査者：
-------	-----	------

年 月 日

## 予備調査（保育所職員用）

\*1 枚目のシートにご記入ください。

1. あなたについてお聞きします。

(1) お名前（ふりがな） \_\_\_\_\_ (2) 男 ・ 女 (○をつけてください)

(3) 年齢 ( ) 歳

(4) 役職、職種をお書きいただき、常勤・非常勤に○をつけてください。

(例 ① 園長、主任など ②保育士、調理師など)

①役職 ( ) ②職種 ( ) ③ 常勤 ・ 非常勤

(5) 保育士としての経験年数 ( ) 年

(6) 現在の居住地域 (例 熊本市北区植木町)

(7) 現在のお住まいは震災前とは異なりますか。①に○をつけて理由もお書きください。

①震災前と同じ ②震災前と異なる

②理由 ( )

(8) 公設避難所での避難の経験はありますか。

① 有 ・ 無 ②避難期間 ( )

③避難先 ( )

(9) 現在同居されている家族と年齢、ご所属（職業）をお書きください。

(例 夫 45 歳 市役所職員 長男 12 歳 小学生 父方祖父 62 歳 自営業 父方祖母 61 歳 無職)

\_\_\_\_\_ ( ) 歳 職業 ( ) \_\_\_\_\_ ( ) 歳 職業 ( )

\_\_\_\_\_ ( ) 歳 職業 ( ) \_\_\_\_\_ ( ) 歳 職業 ( )

\_\_\_\_\_ ( ) 歳 職業 ( ) \_\_\_\_\_ ( ) 歳 職業 ( )

\_\_\_\_\_ ( ) 歳 職業 ( ) \_\_\_\_\_ ( ) 歳 職業 ( )

**\* 2の質問以降はインタビュー形式でお答えいただきます**

2. 職場の状況についてお伺いします

(1) (管理職のみ) 震災直後～現在までの保育所の勤務体制と理由 園日誌などをいただき感想のみ聞き取りも可

(2) (管理職のみ) 保育所の利用状況と理由 園日誌などをいただき感想のみ聞き取りも可

(3) 震災直後～現在までの保育内容の変化

(4) 被災後の子どもと保護者への関わりについてお伺いします。

①通常保育内・外での子どもへの関わり

②保護者への通常と通常は行わない関わり

3. 園児の状況についてお伺いします

(1) 被災の翌朝 (最初の被災は夜だった) の子どもの様子

(2) 震災前から現在までの子どもの変化

1) 体調面

2) 情緒面

3) 遊び方

4. 保護者 (父母両方) の状況についてお伺いします

(1) 被災の翌朝 (最初の被災は夜だった) の保護者の様子

(2) 震災前から現在までの保護者の変化

1) 体調面

2) 情緒面

3) 家庭環境

5. あなた自身についてお伺いします

(1) 震災前、直後、現在の体調の変化

(2) 震災前、直後、現在の気持ちの変化

(3) 震災前、直後、現在の生活（就労状況）の変化

(4) 震災前後での職業人としての気持ちの変化があったか

(5) 震災前、直後、現在のストレスの変化

①仕事上のストレスの変化

②私生活のストレスの変化

③震災直後から現在まで職業人と家庭との両立に支障や葛藤はあったか

6. 支援についてお伺いします

(1) 仕事上で職場内外からのあってよかった支援、あったら良かった支援

(2) 仕事上のことで震災直後に知りたかったこと、今現在知りたいこと

(3) 被災者としてあってよかった支援、あったら良かった支援

(4) 被災者として震災直後に知りたかったこと、今現在知りたいこと

7. 震災直後と現在までの親子への関わりの自己評価

(1) どのようなことをしようとしたか、何ができましたか（10点満点中何点ぐらいですか？）

(2) どのようなことがしたかったか、何ができませんでしたか（10点満点中何点ぐらいですか？）

(3) 震災後に心がけるようになったことはありますか

8. 機関内、多機関連携についてお伺いします

(1)（管理職のみ）県や市、社会福祉協議会などから得られた支援。どこに何を要請したか。

(2)（全員）震災前、直後、現在の職場内での連携。通常の連携と非常時の連携の違い。

(3) (全員) 震災前、直後、現在の多機関との連携について。どこの機関とどのような連携をしたか。連携して良かったこと、良くなかったこと

(4) (全員) 家庭内、近隣との連携に変化があるか (あったか)

9. 熊本の県民性を教えてください。

10. その他

子育て支援センター名：	地域：	調査者：
-------------	-----	------

年 月 日

### 予備調査（子育て支援センター職員用）

**\*1枚目のシートにご記入ください。**

1. あなたについてお聞きします。

(1) お名前（ふりがな） \_\_\_\_\_ (2) 男 ・ 女 (○をつけてください)

(3) 年齢 ( ) 歳

(4) 役職、職種をお書きいただき、常勤・非常勤に○をつけてください。

(例 ① センター長、主任など ②保育士、資格なしなど)

①役職 ( ) ②職種 ( ) ③ 常勤 ・ 非常勤

(5) 保育士としての経験年数 ( ) 年

(その内、子育て支援センターでの経験年数 ( ) 年)

(6) 現在の居住地域 (例 熊本市北区植木町)

(7) 現在のお住まいは震災前とは異なりますか。①に○をつけて理由もお書きください。

①震災前と同じ ②震災前と異なる

②理由 ( )

(8) 公設避難所での避難の経験はありますか。

① 有 ・ 無 ②避難期間 ( )

③避難先 ( )

(9) 現在同居されている家族と年齢、ご所属（職業）をお書きください。

(例 夫 45歳 市役所職員 長男 12歳 小学生 父方祖父 62歳 自営業 父方祖母 61歳 無職)

\_\_\_\_\_ ( )歳 職業 ( ) \_\_\_\_\_ ( )歳 職業 ( )

\_\_\_\_\_ ( )歳 職業 ( ) \_\_\_\_\_ ( )歳 職業 ( )

\_\_\_\_\_ ( )歳 職業 ( ) \_\_\_\_\_ ( )歳 職業 ( )

\_\_\_\_\_ ( )歳 職業 ( ) \_\_\_\_\_ ( )歳 職業 ( )

**\* 2の質問以降はインタビュー形式でお答えいただきます**

**2. 職場の状況についてお伺いします**

(1) (管理職のみ) 震災直後～現在までの子育て支援センターの勤務体制と理由 日誌などをいただき感想のみ聞き取りも可

(2) (管理職のみ) 子育て支援センターの利用状況と理由 日誌などをいただき感想のみ聞き取りも可

(3) 震災直後～現在までの保育内容の変化

(4) 被災後の親子への関わりについてお伺いします。

①通常事業での親子への関わり

②通常事業外の親子への関わり

**3. 子どもの状況についてお伺いします**

(1) 被災の翌朝（最初の被災は夜だった）または開所再会した時に来所した時の子どもの様子

(2) 震災前から現在までの子どもの変化

1) 体調面

2) 情緒面

3) 遊び方

**4. 保護者の状況についてお伺いします**

(1) 被災の翌朝（最初の被災は夜だった）または開所再会した時に来所した時の保護者の様子

(2) 震災前から現在までの保護者の変化

1) 体調面

2) 情緒面

3) 家庭環境

**5. あなた自身についてお伺いします**

(1) 震災前、直後、現在の体調の変化

(2) 震災前、直後、現在の気持ちの変化

(3) 震災前、直後、現在の生活（就労状況）の変化

(4) 震災前後での職業人としての気持ちの変化があったか

(5) 震災前、直後、現在のストレスの内容と程度の変化

①仕事上のストレスの変化

②私生活のストレスの変化

③震災直後から現在まで職業人と家庭との両立に支障や葛藤はあったか

#### 6. 支援についてお伺いします

(1) 仕事上で職場内外からのあってよかった支援、あったら良かった支援

(2) 仕事上のことで震災直後に知りたかったこと、今現在知りたいこと

(3) 被災者としてあってよかった支援、あったら良かった支援

(4) 被災者として震災直後に知りたかったこと、今現在知りたいこと

#### 7. 震災直後と現在までの親子への関わりの自己評価

(1) どのようなことをしようとしたか、何ができましたか（10点満点中何点ぐらいですか？）

(2) どのようなことがしたかったか、何ができませんでしたか（10点満点中何点ぐらいですか？）

(3) 震災後に心がけるようになったこと

#### 8. 機関内、多機関連携についてお伺いします

(1)（管理職のみ）県や市、社会福祉協議会などから得られた支援。どこに何を要請したか。

(2)（全員）震災前、直後、現在の職場内での連携。通常の連携と非常時の連携の違い。

(3)（全員）震災前、直後、現在の多機関との連携について。どこの機関とどのような連携をしたか。連携して良かったこと、良くなかったこと

(4) (全員) 家庭内、近隣との連携に変化があるか (あったか)

9. 熊本の県民性を教えてください。

10. その他

## 熊本地震被災体験レポート（保育所職員の方）

年 月 日

保育所名をお書きください	地域（例 熊本市北区植木町）
--------------	----------------

## 1. あなたについてお伺いします。

(1) お名前（ふりがな） \_\_\_\_\_ (2) 男 ・ 女 （○をつけてください）

(3) 年齢 （ ） 歳

(4) 役職、職種をお書きいただき、常勤・非常勤に○をつけてください。

（例 ① 園長、主任など ②保育士、調理師など

①役職（ ） ②職種（ ） ③ 常勤 ・ 非常勤

(5) 保育士としての経験年数 （ ） 年

(6) 現在の居住地（例 熊本市北区植木町）

(7) 現在のお住まいは震災前とは異なりますか。①に○をつけて理由もお書きください。

①震災前と同じ ②震災前と異なる

②理由（ ）

(8) 公設避難所での避難の経験はありますか。

① 有 ・ 無 ②避難期間（ ）

③避難先（ ）

(9) 現在同居されている家族と年齢、ご所属（職業）をお書きください。

（例 夫 45 歳 市役所職員 長男 12 歳 小学生 父方祖父 62 歳 自営業 父方祖母 61 歳 無職）

\_\_\_\_\_ ( ) 歳 職業 ( ) \_\_\_\_\_ ( ) 歳 職業 ( )

\_\_\_\_\_ ( ) 歳 職業 ( ) \_\_\_\_\_ ( ) 歳 職業 ( )

\_\_\_\_\_ ( ) 歳 職業 ( ) \_\_\_\_\_ ( ) 歳 職業 ( )

\_\_\_\_\_ ( ) 歳 職業 ( ) \_\_\_\_\_ ( ) 歳 職業 ( )

## 2. 職場の状況についてお伺いします

震災直後～現在までの保育所の勤務体制、保育所の利用状況、震災直後～現在までの保育内容の変化などについて自由にお書きください。

3. 被災後から現在まで**園児と保護者への関わり**について、通常の保育・通常は行わない関わりなどについて自由にお書きください。

4. **園児の状況**についてお伺いします。被災の翌朝の子どもの様子、震災前から現在までの子どもの変化について、体調面、情緒面、遊び方などについて自由にお書きください。

5. **保護者（父母両方）の状況**についてお伺いします。被災の翌朝の保護者の様子、震災前から現在までの保護者の変化、体調面、情緒面、家庭環境などについて自由にお書きください。

6. **あなた自身**についてお伺いします。震災前、直後、現在の体調の変化、気持ちの変化、就労状況や生活全般の変化について自由にお書きください。また震災前後での職業人としての気持ちに変化がありましたか。

7. 震災前、直後、現在の仕事上のストレス、生活上のストレスの内容と変化について自由にお書きください。  
震災直後における職業人と家庭との両立に支障や葛藤はありましたか。

8. **仕事上の支援**についてお伺いします。仕事上で職場内外からのあってよかった支援、あったら良かった支援、仕事上のことで震災直後に知りたかったこと、今現在知りたいことなど自由にお書きください。

9. **生活上の支援**についてお伺いします。被災者としてあってよかった支援、あったら良かった支援、被災者として震災直後に知りたかったこと、今現在知りたいことなど自由にお書きください。

10. 震災直後と現在までの**親子への関わり**についてお伺いします。親子に対して何をしようと思いましたか、何ができましたか、何ができませんでしたか、あなたの関わり全体を10点満点で表すと自己評価で何点になりますか？また、震災後に心がけるようになったことはありますか。

11. **機関内、多機関連携**についてお伺いします。県や市、社会福祉協議会などからどのような支援を得ましたか。どこかに支援を要請しましたか。震災前、直後、現在の職場内での連携、通常の連携と非常時の連携の違い、他の機関との連携について、どこの機関とどのような連携をしたか。連携して良かったこと、良くなかったことなど自由にお書きください。

12. 震災前後で**家庭内での協力体制、近隣との連携**に変化はありましたか。自由にお書きください。

13. 熊本の**県民性**をおしえてください。

14. その他、自由にお書きください。

\*紙面が足りない場合は裏面などでもご利用ください。  
\*ご協力ありがとうございました。

熊本地震被災体験レポート (子育て支援センター職員の方)

年 月 日

子育て支援センター名をお書きください	地域 (例 熊本市北区植木町)
--------------------	-----------------

1. あなたについてお伺いします。

(1) お名前 (ふりがな) \_\_\_\_\_ (2) 男 ・ 女 (○をつけてください)

(3) 年齢 ( ) 歳

(4) 役職、職種をお書きいただき、常勤・非常勤に○をつけてください。  
(例 ① 園長、主任など ②保育士、調理師など)

①役職 ( ) ②職種 ( ) ③ 常勤 ・ 非常勤

(5) 保育士としての経験年数 ( ) 年  
(その内、子育て支援センターでの経験年数 ( ) 年)

(6) 現在の居住地域 (例 熊本市北区植木町)

(7) 現在のお住まいは震災前とは異なりますか。①②のどちらかに○をつけて理由もお書きください。

①震災前と同じ ②震災前と異なる

②理由 ( )

(8) 公設避難所での避難の経験はありますか。

① 有 ・ 無 ②避難期間 ( )

③避難先 ( )

(9) 現在同居されている家族と年齢、ご所属 (職業) をお書きください。

(例 夫 45 歳 市役所職員 長男 12 歳 小学生 父方祖父 62 歳 自営業 父方祖母 61 歳 無職)

\_\_\_\_\_ ( ) 歳 職業 ( ) \_\_\_\_\_ ( ) 歳 職業 ( )

\_\_\_\_\_ ( ) 歳 職業 ( ) \_\_\_\_\_ ( ) 歳 職業 ( )

\_\_\_\_\_ ( ) 歳 職業 ( ) \_\_\_\_\_ ( ) 歳 職業 ( )

\_\_\_\_\_ ( ) 歳 職業 ( ) \_\_\_\_\_ ( ) 歳 職業 ( )

2. **職場の状況**についてお伺いします

震災直後～現在までの子育て支援センターの勤務体制、子育て支援センターの利用状況、震災直後～現在までの開室、事業内容の変化などについて自由にお書きください。

3. 被災後から現在まで子育て支援センターに来所する親子への関わりについて、通常に関わり・通常は行わない関わりなどについて自由にお書きください。

4. 来所する子どもの状況についてお伺いします。被災後に来所した時の子どもの様子、震災前から現在までの子どもの変化について、体調面、情緒面、遊び方などについて自由にお書きください。

5. 保護者（父母両方）の状況についてお伺いします。被災後に来所した時の保護者の様子、震災前から現在までの保護者の変化、体調面、情緒面、家庭環境などについて自由にお書きください。

6. あなた自身についてお伺いします。震災前、直後、現在の体調の変化、気持ちの変化、就労状況や生活全般の変化について自由にお書きください。また震災前後での職業人としての気持ちに変化がありましたか。

7. 震災前、直後、現在の仕事上のストレス、生活上のストレスの内容と変化について自由にお書きください。震災直後における職業人と家庭との両立に支障や葛藤はありましたか。

8. **仕事上の支援**についてお伺いします。仕事上で職場内外からのあってよかった支援、あったら良かった支援、仕事上のことで震災直後に知りたかったこと、今現在知りたいことなど自由にお書きください。

9. **生活上の支援**についてお伺いします。被災者としてあってよかった支援、あったら良かった支援、被災者として震災直後に知りたかったこと、今現在知りたいことなど自由にお書きください。

10. 震災直後と現在までの**親子への関わり**についてお伺いします。親子に対して何をしようと思いましたか、何ができましたか、何ができませんでしたか。あなたの関わり全体を10点満点で表すと自己評価で何点ですか？また、震災後に心がけるようになったことはありますか。

11. **機関内、多機関連携**についてお伺いします。県や市、社会福祉協議会などからどのような支援を得ましたか。どこかに支援を要請しましたか。震災前、直後、現在の職場内での連携、通常の連携と非常時の連携の違い、他の機関との連携について、どこの機関とどのような連携をしたか。連携して良かったこと、良くなかったことなど自由にお書きください。

12. 震災前後で**家庭内での協力体制、近隣との連携**に変化はありましたか。自由にお書きください。

13. 熊本の**県民性**をおしえてください。

14. その他、自由にお書きください。

\*紙面が足りない場合は裏面などでもご利用ください。  
\*ご協力ありがとうございました。

保育所名：	地域：	調査者：
-------	-----	------

年 月 日

### 予備調査（保育所保護者用）

**\*1 枚目のシートにご記入ください。**

1. あなたについてお聞きします

(1) お名前（ふりがな） \_\_\_\_\_ (2) 男 ・ 女 (○をつけてください)

(2) 年齢 ( ) 歳

(2) 入所されているお子様（例 長女 4歳5ヶ月 長男 1歳5ヶ月）

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

(3) 現在の居住地域（例 熊本市北区植木町）

(4) 現在のお住まいは震災前とは異なりますか。①②のどちらかに○をつけて理由もお書きください。

①震災前と同じ                      ②震災前と異なる

②理由 ( )

(5) 公設避難所での避難の経験はありますか。

① 有 ・ 無                      ②避難期間 ( )

③避難先 ( )

(6) 現在同居されている家族と年齢、ご所属（職業）をお書きください。

（例 夫 45歳 市役所職員 長男 12歳 小学生 父方祖父 62歳 自営業 父方祖母 61歳 無職）

\_\_\_\_\_ ( )歳 職業( ) \_\_\_\_\_ ( )歳 職業( )

\_\_\_\_\_ ( )歳 職業( ) \_\_\_\_\_ ( )歳 職業( )

\_\_\_\_\_ ( )歳 職業( ) \_\_\_\_\_ ( )歳 職業( )

\_\_\_\_\_ ( )歳 職業( ) \_\_\_\_\_ ( )歳 職業( )

(7) 現在の就労状況

**\* 2の質問以降はインタビュー形式でお答えいただきます**

2. お子さんについてお伺いします。

(1) 震災当日から1週間以内の様子

①子どもの様子

1) 体調面

2) 情緒面

3) 遊び方

②子どもに対してどのようなことを行ったか

③できなかったこと

(2) 震災当時から現在まで

①震災前から現在までの子どもの変化

1) 体調面

2) 情緒面

3) 遊び方

(3) 震災後から今日まで子どもに行ったこと

(4) 震災後に心がけるようになったこと

3. 保育所についてお伺いします

(1) 利用までの日数と震災前、直後、現在の利用回数の変化と理由

(2) 被災翌日から現在まで、通園再開までの日数、保育所で通常通りであること、通常通りでないこと

(3) 震災直後～現在までの保育内容の変化

(4) 保育所で受けた支援の内容と評価について

(5) 保育所、保育士の動きをどう感じたか

(6) 保育所に期待すること

4. あなた自身についてお伺いします

(1) 震災前、直後、現在の体調の変化

(2) 震災前、直後、現在の気持ちの変化

(3) 震災前、直後、現在の生活の変化、就労状況（震災直後の職務内容 勤務内容、役割、勤務体制）

(4) 震災前、直後、現在の家庭内、近隣との連携について

(5) 震災前、直後、現在のストレスの内容と程度の変化

(6) 震災直後における職業人と家庭との両立に支障や葛藤はありましたか

(7) 震災前、震災時、震災後に頼りにしていた人は？（有無および人物内容）

5. 支援について

(1) 被災直後から現在までに受けている支援

(2) 生活上のあってよかった支援、あつたら良かった支援

(3) 生活上のことで震災直後に知りたかったこと、今現在知りたいこと

(4) 子どもについてあってよかった支援、あつたら良かった支援

(5) 子どもについて震災直後に知りたかったこと、今現在知りたいこと

6. 熊本の県民性を教えてください。

7. その他 自由回答

子育て支援センター名：	地域：	調査者：
-------------	-----	------

年 月 日

## 予備調査（子育て支援センター利用者用）

\*1枚目のシートにご記入ください。

1. あなたについてお聞きします

(1) お名前（ふりがな） \_\_\_\_\_ (2) 男 ・ 女 （○をつけてください）

(2) 年齢 （ ） 歳

(2) 入所されているお子様（例 長女 4歳5ヶ月 長男 1歳5ヶ月）

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

(3) 現在の居住地（例 熊本市北区植木町）

(4) 現在のお住まいは震災前とは異なりますか。①に○をつけて理由もお書きください。

①震災前と同じ                      ②震災前と異なる

②理由（ \_\_\_\_\_ ）

(5) 公設避難所での避難の経験はありますか。

① 有 ・ 無                      ②避難期間（ \_\_\_\_\_ ）

③避難先（ \_\_\_\_\_ ）

(6) 現在同居されている家族と年齢、ご所属（職業）をお書きください。

（例 夫 45歳 市役所職員 長男 12歳 小学生 父方祖父 62歳 自営業 父方祖母 61歳 無職）

\_\_\_\_\_ ( )歳 職業( \_\_\_\_\_ ) \_\_\_\_\_ ( )歳 職業( \_\_\_\_\_ )

\_\_\_\_\_ ( )歳 職業( \_\_\_\_\_ ) \_\_\_\_\_ ( )歳 職業( \_\_\_\_\_ )

\_\_\_\_\_ ( )歳 職業( \_\_\_\_\_ ) \_\_\_\_\_ ( )歳 職業( \_\_\_\_\_ )

\_\_\_\_\_ ( )歳 職業( \_\_\_\_\_ ) \_\_\_\_\_ ( )歳 職業( \_\_\_\_\_ )

(7) 現在の就労状況

**\* 2の質問以降はインタビュー形式でお答えいただきます**

2. お子さんについてお伺いします。

(1) 震災当日から1週間以内の様子

①子どもの様子

1) 体調面

2) 情緒面

3) 遊び方

②子どもに対してどのようなことを行ったか

③できなかったこと

(2) 震災当時から現在まで

①震災前から現在までの子どもの変化

1) 体調面

2) 情緒面

3) 遊び方

(3) 震災後から今日まで子どもに行ったこと

(4) 震災後に心がけるようになったこと

3. 子育て支援センターについてお伺いします

(1) 利用までの日数と震災前、直後、現在の利用回数の変化と理由

(2) 被災翌日から現在まで、利用再開までの日数、子育て支援センターで通常通りであること、通常通りでないこと

(3) 震災直後～現在までの子育て支援センターの内容の変化

(4) 子育て支援センターで受けた支援の内容と評価について

(5) 子育て支援センター、職員の動きをどう感じたか

(6) 子育て支援センターに期待すること

4. あなた自身についてお伺いします

(1) 震災前、直後、現在の体調の変化

(2) 震災前、直後、現在の気持ちの変化

(3) 震災前、直後、現在の生活の変化、就労状況（震災直後の職務内容 勤務内容、役割、勤務体制）

(4) 震災前、直後、現在の家庭内、近隣との連携について

(5) 震災前、直後、現在のストレスの変化

(6) 震災直後から現在まで職業人と家庭との両立に支障や葛藤はありましたか

(7) 震災前、震災時、震災後に頼りにしていた人は？（有無および人物内容）

5. 支援について

(1) 被災直後から現在までに受けている支援

(2) 生活上のあってよかった支援、あつたら良かった支援

(3) 生活上のことで震災直後に知りたかったこと、今現在知りたいこと

(4) 子どもについてあってよかった支援、あつたら良かった支援

(5) 子どもについて震災直後に知りたかったこと、今現在知りたいこと

6. 熊本の県民性を教えてください。

7. その他 自由回答



(7) 現在の就労状況

2. **入所しているお子さまの状況**についてお伺いします。被災の翌朝の子どもの様子、震災前から現在までの子どもの変化について、体調面、情緒面、遊び方などについて自由にお書きください。

3. 被災直後から現在までお子さまに対してどのようなことを行いましたか、心がけるようになったことはありますか、またできなかったことはどのようなことですか、自由にお書きください。

4. **保育所**についてお伺いします。被災翌日から現在まで、通園再開までの日数、震災前、直後、現在の利用回数の変化と理由、保育所で通常通りであること、通常通りでないことなど自由にお書きください。

5. **保育所**でどのような**支援**を受けましたか、それはどのように評価できますか、保育所、保育士の動きをどう感じたか、保育所に期待することなど自由にお書きください。

6. **あなた自身**についてお伺いします。震災前、直後、現在の体調、気持ち、生活の変化、就労状況（震災直後の職務内容 勤務内容、役割、勤務体制）の変化など自由にお書きください。

7. 震災前、直後、現在の**家庭内での助け合い**、**近隣との連携**について自由にお書きください。

8. 震災前、直後、現在の**ストレスの内容と程度の変化**について自由にお書きください。

9. 震災直後における職業人と家庭との両立に支障や葛藤はありましたか。

10. 震災前、震災時、震災後に頼りにしていた人はいますか。また何が頼りになりましたか、自由にお書きください。

11. 支援についてお伺いします。被災直後から現在までに受けている支援、生活上のあってよかった支援、あったら良かった支援、生活上のことで震災直後に知りたかったこと、今現在知りたいことはありますか。自由にお書きください。

12. 支援についてお伺いします。被災直後から現在までに受けている支援、お子さまについてあってよかった支援、あったら良かった支援、子どもについて震災直後に知りたかったこと、今現在知りたいことはありますか。自由にお書きください。

13. 熊本の県民性を教えてください。

14. その他、自由にお書きください。

\*紙面が足りない場合は裏面などでもご利用ください。  
\*ご協力ありがとうございました。

## 熊本地震被災体験レポート（子育て支援センター利用者用）

年 月 日

子育て支援センター名をお書きください	地域（例 熊本市北区植木町）
--------------------	----------------

## 1. あなたについてお聞きします

(1) お名前（ふりがな） \_\_\_\_\_ (2) 男 ・ 女 （○をつけてください）

(2) 年齢 （ ） 歳

(2) 入所されているお子さま（例 長女 4歳5ヶ月 長男 1歳5ヶ月）

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

(3) 現在の居住地（例 熊本市北区植木町）

(4) 現在のお住まいは震災前とは異なりますか。①②のどちらかに○をつけて理由もお書きください。

①震災前と同じ                      ②震災前と異なる

②理由（ \_\_\_\_\_ ）

(5) 公設避難所での避難の経験はありますか。

① 有 ・ 無                      ②避難期間（ \_\_\_\_\_ ）

③避難先（ \_\_\_\_\_ ）

(6) 現在同居されている家族と年齢、ご所属（職業）をお書きください。

（例 夫 45歳 市役所職員 長男 12歳 小学生 父方祖父 62歳 自営業 父方祖母 61歳 無職）

\_\_\_\_\_ ( )歳 職業( \_\_\_\_\_ ) \_\_\_\_\_ ( )歳 職業( \_\_\_\_\_ )

\_\_\_\_\_ ( )歳 職業( \_\_\_\_\_ ) \_\_\_\_\_ ( )歳 職業( \_\_\_\_\_ )

\_\_\_\_\_ ( )歳 職業( \_\_\_\_\_ ) \_\_\_\_\_ ( )歳 職業( \_\_\_\_\_ )

\_\_\_\_\_ ( )歳 職業( \_\_\_\_\_ ) \_\_\_\_\_ ( )歳 職業( \_\_\_\_\_ )

(7) 現在の就労状況

2. **子育て支援センター**を利用されているお子さまの状況についてお伺いします。被災の翌朝の子どもの様子、震災前から現在までの子どもの変化について、体調面、情緒面、遊び方などについて自由にお書きください。

3. 被災直後から現在までお子さまに対してどのようなことを行いましたか、心がけるようになったことはありますか、またできなかったことはどのようなことですか、自由にお書きください。

4. **子育て支援センター**についてお伺いします。被災翌日から現在まで、利用再開までの日数、震災前、直後、現在の利用回数の変化と理由、子育て支援センターで通常通りであること、通常通りでないことなど自由にお書きください。

5. **子育て支援センター**でどのような**支援**を受けましたか、それはどのように評価できますか、子育て支援センター、職員の動きをどう感じたか、子育て支援センターに期待することなど自由にお書きください。

6. **あなた自身**についてお伺いします。震災前、直後、現在の体調、気持ち、生活の変化、就労状況（震災直後の職務内容 勤務内容、役割、勤務体制）の変化など自由にお書きください。

7. 震災前、直後、現在の**家庭内での助け合い**、**近隣との連携**について自由にお書きください。

8. 震災前、直後、現在の**ストレス**の内容と程度の変化について自由にお書きください。

9. 震災直後における職業人と家庭との両立に支障や葛藤はありましたか。

10. 震災前、震災時、震災後に頼りにしていた人はいますか。また何が頼りになりましたか、自由にお書きください。

11. 支援についてお伺いします。被災直後から現在までに受けている支援、生活上のあってよかった支援、あったら良かった支援、生活上のことで震災直後に知りたかったこと、今現在知りたいことはありますか。自由にお書きください。

12. 支援についてお伺いします。被災直後から現在までに受けている支援、お子さまについてあってよかった支援、あったら良かった支援、子どもについて震災直後に知りたかったこと、今現在知りたいことはありますか。自由にお書きください。

13. 熊本の県民性を教えてください。

14. その他、自由にお書きください。

\*紙面が足りない場合は裏面などでもご利用ください。  
\*ご協力ありがとうございました。

## くまもとプロジェクト「予備調査報告書」

発行日 2018年1月25日

発行者 日本多機関連携臨床学会

学会事務局

〒112-8681 東京都文京区目白台2-8-1

日本女子大学家政学部児童学科吉澤研究室内

学会連絡先 takikanrenkei@gmail.com